



續風土記

甲子丑族
 共九
 共十三

ル 4
 375
 3



門牌
號 375
卷 8



筑前國續風土記卷之四

那珂郡

住吉社

妙圓寺

松月菴舊跡

春吉

丸丸衣

宗福寺

香海墓

澳夷社

自性院

七力辻

岩泊

東光院

馬出

妙德寺

蓑寫

志賀社

文珠堂

八尋七兵衛
藏書



福島博多あるゆへに貨物と交易ありて大
 低國の東西に中央にあるて四方運送に便りあり
 國中にある部ありて名つきてしる也

和名抄に載る此部の今の名九つあり

田来 曰佐 今日佐と村も上下ありて此の部なり 那珂 佐村

良久 海部 持多福島の海 中島 持多島福島の海

さてハ中島と云ふとやまをいふの神の儀と海との
 別と云ふはゆへに此の海部の今も中島の今もいふは別
 別と云ふはゆへに 三宅 村の名を 山口 板東

今橋の所の村れ名

今泉村 某院村 庄村 下野原村

| | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 大橋谷村 | 平尾村 | 高宮村 | 野乃村 | 清水村 |
| 塩原村 | 三宅村 | 和田村 | 野多目村 | 左目村 |
| 片繩村 | 良久村 | 屋形泉村 | 西隈村 | 東隈村 |
| 道菅村 | 今光村 | 別河村 | 西畑村 | 南畑村 |
| 成竹村 | 不入村 | 五ヶ山村 | 一濃村 | 埋持村 |
| 山田村 | 仲村 | 安德村 | 上橋泉村 | 下橋泉村 |
| 五郎丸村 | 杉本村 | 仲系村 | 上白水村 | 赤長村 |
| 上野原村 | 上曰佐村 | 下曰佐村 | 横手村 | 須久村 |
| 小倉村 | 春日村 | 井根田村 | 麦野村 | 諸島村 |
| 井鹿村 | 五十川村 | 竹下村 | 那珂村 | 東光寺村 |
| 比惠村 | 住吉村 | 東野村 | 馬出村 | 金平村 |

畑口村 志賀嶋

住吉社

住吉村とあり延喜式神名帳に筑前那珂郡と住吉の
社三座並名とあり住吉村は博多の南六十許とあり
住吉大明神あり留ひ所と村の名をせり凡住吉大明神ハ
底筒男命 中筒男命 表筒男命の三神也此三神を
伊弉諾尊筑紫日向の小戸に橋の柱系とて沖身濁
穢と後除しあり付化生しあり九神内之神代
より此河に橋を築き日本紀神代上巻と考ふと白
伊弉諾尊吾身れ濁穢と除ささると宣ひと

別江と筑紫れ日向の小戸乃橋の柱系とありすして
沖後とありありと身れきとて此河とありとあり
んとて別真言して宣ひ上ッ漱ハ是高き下ッ漱ハ
こまきとありと宣ひと則申ッ漱とてすきとあり
以てうめと神と稱て八十柱津日神とあり次とあり
とありと直さんとて生る神と号て申津少童命とあり
次と中筒男命又潮のうへに浮濯き因て以て生る神
と表津少童命とあり次と表筒男命とあり九神ま
に底筒男命 中筒男命 表筒男命は是則住吉大明神
也此は少童命 中筒男命 表筒男命は是阿曇連
等り齊なる神也神ハ志賀 神代卷と記さるにあり

のとし其八十在津日神直日神大直日神ハ神代巻より
まればとあるといふ事と記され今美院の邑とある所の
教言固大明神ハ此ニ神なりと云々社家記云傳ふ事ハ
福高れ神と記人伊集院尊の化せしと云ふ事ハ此
本の内住吉志望と記産一と云ふ國と化せしといふ
ことハ況日向國といふ神也沖津師と云ふことヤ
然る神代巻と小戸の橋に柱を系ハ筑前と云ふこと
日向といふ事ハ蓋上古より日向國と云ふことハ
けし日向といふハ九玉の懸る事ハ其地一列ありて
上代ハ筑紫別とも多つことハ迹々藝命に記し
け地と向韓国真末通笠沙之御前而朝日真刺

国夕日之日照国こと宣へり此儀よりして筑紫の事
とすといふことヤけしを筑紫と口のなれば乃
端して海中と云ふ國ありハ船を東方の日向といふ
而方れ日向といふこと九列と記して日向といひて
筑中筑前ハ之韓と向いし事ありて又日向といふ
今れ日向の國れ名を景行天皇の沖時と始まる
凡日本乃と云ふことヤけしを筑前と云ふことハ成務天皇
より後の事とて神代ハ日向と日向筑前筑前
といふ名也亦日本紀和記と云住吉之神筑前小戸と
あり釋日本記曰住吉神者本在筑前小戸即神功
皇后初遷居於撰津墨江耳宗祇法師白橋

小戸能前國立是之郡昭々袖中抄曰住吉神本
筑前小戸之有又古事記曰住吉大神此荒御
魂者常在筑紫橘小戸和魂今在摸津墨江耳
神功皇后初遷居摸津墨江是尔の説皆橘小戸能
ありあり説極ありて是也や彼九神皆能前之有て
日向小戸ありあり日向小戸の橋は橋系
といふはあり或日向小戸ありあり強く小戸は地と求ん
てて神代巻抄小戸は今日日向小戸郡屬ありと書あり
其説云此ありいんとありてこれ日向小戸人の言あり
橘小戸郡屬といふはありと小戸は郡屬といふはあり
橘小戸と神あり橘小戸郡屬といふはあり唯一記曰

日向橘小戸郡屬と鷹鷲草薺不合尊是也と物言
日向小戸は則橘小戸にて小戸は非事明也今能前
の國中におかしく其名を尋りて小戸は姫濱とあり立
名を物屋部及住吉部とあり青木は志戸部及是田
郡とあり住吉神すはるる河津を漸入はるれと
神代巻にありて日向小戸の説は神と能前小戸
とありて之は住吉神のすはるる河津と小戸の橋は橋系と云
成てし物言は小戸の橋の橋系といは住吉の事ありと定
す一神功皇后三韓と平しけむひ日向神は眞
助多し事ありて是記とのせり橘は長門小戸の
住吉ハ神功皇后の耐りて彼よりありて日向住吉と

いふ名を 皇后の付住吉大神皇后の神と託して四方と
修りし按はれ地とて宣ふして曰住吉の國ありと因て
之をいふつめありて名曰住吉といふ是より依て長列乃
住吉辨別に住吉は名もあまなり 釋り本記に此神の
荒冲魂を尚託せり者むいふ一和魂をいふ言ひ
者のと皇后おしえの事 こと通をありあやとあり
説とてこれに此形を託れ住吉一神代より延産の地
として長門按はれ住吉大明神の本初あり事いふ
此社今村中と傳ふは百餘年前までハ社の色入
海とて于深ありしと也 數十年前までハ老人ありて
つらき時け地とて于深ありて潮滞事とて是をいふ
とあり

△
されハ宗祇法師の撰集紀のにも住吉の海を
書り今案するに住吉の村より少くありしハ潮入に深
ありし年々とて深きと潮田と名をありし 尾張の鳴
海浦前の名戸磯岐に八島の國宗像乃住吉とての
を海田とありし如くありし 沖社を招れ一村成り申
とあり西に向て之をいふハ異域降伏の相とあり玉
ふありし社前長路を宮所移せし神とありし此
沖社といふ一朝廷よりも海とありし也 續
日本記に 聖武天皇天平九年四月に新羅國我
とて神ありしハ 伊勢大神宮能繁住吉八幡宮
及香椎宮ハ 勅使とて奉幣して之と告

神臣の相もこの心言風もよくあつてまや直と
かふふ祇法源よりこの此一表の表之今の本はまの生
出りも又此社の神官佐伯昌助といひ者政をて
治承三年伊豆國と頼朝流るまじおりにこれあま志
とこけりもや昌助の才住吉小吏昌永治承四年七
月二十日初て頼朝のまじりて系氏又け日永御藏人
大中臣頼隆も同じ頼朝のまじりて初て系がまじり
伊勢大神宮祠官れ後多うとをけあ人のかねてうると
源家のこまおのこ其志ふまきあこま志を謝せし
ま又ち祈禱のこまじりて祇儀と許されけりて
同年八月十六日昌長の天曹地府れ系と奉仕し頼

隆まの度後とつこじ頼朝自り御鏡と云く
昌長と授あふ是ハ明日の合戦に利運と祈りし
るあつて果して翌十七日山本判官兼隆と頼朝
るあつていひ事尚ふ頼朝にまじりて頼朝のこま
感いあひりも多く神儀とも寄附しあひりて云
傳へりて建武二年尊氏九列下向の時此社に祈
り神儀寄進し一文書今もあて神職の家止
りてし其文と曰

寄進 筑前國 一宮
豊前國河崎庄地
右今度い系兵遂奉皇祈天下を安寧家門

新島所寄迫り件

建武三年三月八日 源朝臣書判有

その後わたくし西國と歩隨へ終りて天下に武將と傳ふ
ひつら重ね多く此神領とありて是も是もとや右の虫
及て外文書に龍前一宮住吉宮と傳ふ今ハ若濟ハ
宮とい一宮といはれり今ハ其の改定りて其
後礼せとあり博多ハ戦争れ巻と成りて初宮も
とあり神領も没収をせしむ神社も甚だしく
毀やとあり社人おも御里の土民ともありぬ住吉大
明神の神社も傍州長母の非法もも多かれと
い地も不潔れやとありて申すもはくおとらへん

あきくへき事ありしや昔々年毎の正月七日鬼
平けの祭とて人々捕へく鬼と号しこ道進んで終りて
石柱とありつけありて追灘のまき意成りて寛永
れりやうりて事終りてはもかの鬼とありつけし
石柱は残りて社前右の方とあり二月七日沖田桓の
祭あり二月七日迄干の祭とて神輿大籠ありて
大籠祭ハ福家ハ少くも
沖田ありて大籠祭
住吉ありて
半里ありてあり
れ浮殿若宮大御神と一宿しむひ翌日平宮と還河を
六月晦日ハ那珂川と沖板あり八月四日新嘗の祭り
九月十三日ハ恒例れ大祭とて十二日博多吉
祥天と神輿は沖とて一宿しむひ翌十三日博多馬

場へ流福馬を其日還御をけし時伶人音楽と奏し
神輿の沖儀し有りまきすしの橋と言ふ橋も又ハ
菅絃橋も名附有り十月二ハ歩村ハ多ありけ日切從
池社あり放生會と稱す此外年毎の小祭多
く祠官と百五十餘人多て是と稱し入り物も大に世と
及ひかる規成も及へる唯むりれ名跡とて菅絃橋
浮殿のそ強りて九月十日祠官今七家あり村人折つてハ沖儀
と傳へ神酒と捧げけりけり物と稱すのそ
長政公年 長政公入國の初めしてハ終るる假殿と申
座り申る儀萬院吉祥院ハ開山寺香法師と命し
白銀二の兩枚本多く賜りて 神殿と彰し建立せり

△ 天和二年 光之君より後田と考附し社と修禊あり
しハ祠官ハ軍も悦の念ハ國人も敬ひやなり 長政
公此社眞之あり付例と社傳と置り松花山園福寺と
号ハ高言ふ也又け社ハ大般若經あり寫りて筆者
ハ原田與種森常力同淨正印禪入道宿望流前松幸
行長清形在馬口ハ高來ふとけ外公家又ハ僧乃
書しに又女筆と申すこと

後古今神祇記

物江海程々系ハ波もあはれ道也一住ハの社在敷道
あはき又青赤と云ととハと通言なり

新後拾遺神祇記

立苑の小戸の法眼を形りてむじふまは社をけ神は身園を
福の山戸沖後成りてりて早しき身なり

妙園寺

住吉村のありて法本山昌林院と号し知恩院の末寺之
如水の川妹尾の安石の室 長政公入國の後厄となり
妙宗と号し佛道とこの世の蒼位といひ此寺の小
菴とて住みおけ人慈悲深くして人とつづくは
もと人成若くは福をれ城なりとも宗物に傳えり
たもともておのりて信心厚く附録あり厄公
ありともや蓮登上人と云傳地ありけ地とあり

妙園厄の依りあり別を居宅と蓮登上人譲りて
つづく向ひありて住めり此時蓮登上人寺成
建と昌林院と号し蓮登上人の用山之元和四年
三月廿八日妙園厄公とてその終ありて是ハ別此寺
築とて墓あり其位牌画像もい寺とあり是よりして
寺号と妙ありと改じ 長政公に叔母ありハ五丁石
ち寺と号附あり今もかりけ地あり

松月菴

東福寺に僧正徹書記字清岩和号と能書と能
後苑園院永亨れり筑前と下り年と経て均京の
後又曰冲時亨徳康正のころ國と下り承天寺

再まは

志りし頃なる後住吉の草庵をひひいて住す都と云し
時の菴と松月菴と号せし、其名をも其名と用て松
月菴といふ冷泉家より田舎拙い、物うかんといひおを
ころしと答ふ、あまうる鄙も都も住るとおもふお
そはうし此里と云ふと送りたり住吉とて讀し哥多く
平生よや一哥二弟七の首二十餘帖と書置しと
今慈雲の茅菴やけて志鳥おとさうぬ是事字
根集しんへたり住吉は松月菴の臨方一町なりとも
宅跡を心と云い徹つと云ひし此をよして海潮漫
あり、あまし火然し坐禅堂の礎ありと云ふり
おのり井ありは是れ跡とて南庭は松りとも云い徹の

の井と云ふに徹り書る松月菴の額傳りて今も菴主
此軒と云けたり菴と云ふは誰と云ふや 光之云乃
寧居立苑重幹ありけり風流閑雅と好んで正徹り
回宅と云ふはひいしり河野と云ふ人暇りけりありは
躬夕れ誦ありて稀の遊覧と其味いしと云ふる
へくまは志ありやと云ふしは慕めて樂のふくま
ふくまはと云ふもきくこと事たりし 光之云 綱政も巡
線の序立ありと云ふは住吉と云ふ一あり

春吉村

住吉此西より始り住吉村の境内に安長七年の以
河村と云ふと云ふも是れ河村の氏家なり此地の田舎と云

農人を以て傳多れ市中に恒す寛永十六七年の比は
志之君此處を初て宅能として足程と多く居るに志を
妻吉と号せしむる住吉九月の念れ月の始より未
きて交易淡りける市場ありしを人多く集り物
穀物を皆入れしむる女前の進して居るものと納
る事ありしに唯妻とのと仰りまはるる春に此物より
まことしき意として妻吉と名付しとありし妻吉お吉と
しめ亦他方もありしに此物も但信託と名しりて
附合するもやいしりし

濡衣 眞主

聖武天皇の御時佐野近世といふ人能前守として下り

一、この事よりかゝる事聞きて死しりしを後いふあり
女と書ししより先れ妻のうめる娘と強母ありしとい
ふもしては娘と失れんとおひ海人とかゝりていふは曉
ありていふさやうに京に娘君の被あつた浮へ甲しく
つらつ物衣とわきまをとりつる物人としりていふは實
とてせむる海人曉ありて兼て物衣とわきま高きこと
は是の父とてせむる事として見むる娘わきまの衣
と川をさしてゆけるは是の娘は寐入る時、強母の若
せむる物衣より父をたぐはる事と知りて忽娘を殺
しりし相次の年娘父れ愛りて二首のうこと詠りし
父愛をて娘れ飛る事と怪りしは強母は仕事

とて妻を送り神に身を出家して肥前松浦山に住り
せし松浦上人と云らるまゝにしてなき名おけりといふは
衣きると言傳へずともよき傳へ具娘は墓昔に福の
西門のりてとてと近きせしり移して今に若狭松原
乃西に橋際博多の東石堂川の東に側し池の内とて
大なりと云ふと云ふと云ふ父は若き人娘のまじりて
めきと為すその昔に若狭の濡衣にけりなき名おけり
濡衣は神をけりてとてとてとてとてとてとてとて
めきと云ふは後人のいふと多きとてとてとてとて
いふ所とす

崇福寺

曰修院仁治元年と湛慧といふ僧太宰府横山嶽に
一寺と建立し仁治元年聖一國師圓永大宰より歸來し
博多と云く湛慧といふと傳して開堂設法せしむ聖一
法師經山の佛燈禪師 無準純書ありし 勅賜萬
年山崇福禪寺と扁額と自筆して聖一と與ふと新
と傳あり此寺と揚て寺号といふ 無準兼てしり勅賜の二
字と書し事元亨釋
書ありし 山号は則此の名を用ひて横嶽山と云へ後
嵯峨院實仁元年と勅詔をて博多に承天寺といふ
と宮寺と云ふ西都法窟山といふ勅額と傳ふ 承天
仁治元年
圓示創立 仁治元年 仁治元年 仁治元年 仁治元年
後圓示東福寺といふ住持の時湛慧より南浦
明和尚と傳して當山の開山といふ南浦は經山虛堂和尚の

才子大德寺開山大燈國師の師大應國師之二十四流宗源圖記曰
龍前横岳山南浦明澄大應國師入宗副經山虛堂龜山
揚波十一世為本朝之一派芝野孤妙心子孤但出大應
院文永四年之明和尚之勅多之國通大應國師の号
とある大應國師此寺之住持なり事二十二年之以後
後二條院嘉元元年之勅とあり京都美秀寺之住
持なり是之依て尚ると才子即山和尚之譲りて
住持せしむ之後に波江眷一派の長老ありて住持し
今之ありて十二代之及りけりしりハ盤榮此地にて寺
産も多し大友宗麟の向を龍前寺前紀ありて
二百二十四所之頃の田地けり此寺之物ありて天正十四年
七月薩摩の兵岩屋丸城と改名せし時此寺も龍前

丸の兵大しかりて數多し堂宇亦く灰燼とありぬ
其時ありて 龜山院後二條院花園院の宸翰
勅家傳及虚堂より傳來の經緯書此院の
重宝一町之皆焼失せり其後再興せり人ともかく名
の之殘りて有りし之を長政元年 長政公尚書の主と
成りて後大德寺の書屋國師の寺再興の事と記
る 長政公元春屋之由依し系傳ありて此
事と記す一書屋之向ありてと宣ひりて是身
八旬之及ひを玉の遊歴如難く法性雲英和尚成
持なり 長政公宣ひりて八事府を福ありて是路
して常く系傳難し學福ありて持多の東十里松の

内よりつし善持下りてまゝして今此地に遷居せしむる其
翌年雲英も上方にて遷化せしむる尚寺遷化の事と
春屋の才子江月和尚の住持を承る春屋送命して遷化
の後、尚寺及大徳寺の角龍光院とす江月住持す
へきより定むる是に依て尚寺住持今に於て江月乃
法孫石鏡氏にして數年と經く寺の遷化成就せり
方丈三門佛殿用山堂法守社庫司僧堂浴室書
院小庫裡持橋庫外門内門即架お坐く 長政
公建之しむひわ 此外塔氏三所を瑞雲寺に持多の
富高島丹室室建之しむひわ宗菴、江月和尚建之正
傳庵を 長政公の家臣久野外記入道ト直建之しむる

是長六年と 長政公も歿す百名寺附しむる 是長六年の事
其後用山塔氏も歿す百名寺附せしむる合之百名寺の寺産
よりひり用山南浦和尚横岳の住持と撰ひ八塔の
名と定むる一曰瑞雲菴二曰圓通閣三曰飛瀑岩
四曰此君亭五曰長松嶺六曰白蓮池七曰甘露井八
曰西後落後け塔横岳といふ此塔より今此寺といふ
之塔ありしむるも舊とすして尚の塔と方丈の
前と揚りし寺の事 程沖堂が横岳の住持といふ
け寺と 如水公 長政公 先東市山隆公 長政公の 後東市
正之勝 忠之公の 忠之公乃丈人 善照院 光之公の丈人
寶光院の墳石牌位牌より是に依て世々の國

君系の礼おこころありん

秀海墓

いづれいつの時も、もろくも客僧秀海と云ふものあり、博多
石堂に在り、其の法と行ひて、後舟に宗福陀洛
と後と号し、大洋に渡り、其の後の方と知り、其の時
赤土郡の若一人博多聖所の若一人に船して、其の僧の
志ありとて、松と植へ、塚に村にあり、其の博多に者
乃志願し、も二株に松と入く、今も其の事なり、
いづれいつの時も、もろくも客僧秀海と云ふものあり、博多石堂に在り、其の法と行ひて、後舟に宗福陀洛と後と号し、大洋に渡り、其の後の方と知り、其の時赤土郡の若一人博多聖所の若一人に船して、其の僧の志ありとて、松と植へ、塚に村にあり、其の博多に者乃志願し、も二株に松と入く、今も其の事なり、

澳夷社

宗福の東とあり、沖の夷と、事代主命といふ、一ハ

大社とて、祭礼の形あり、神輿の遊りあり、其の事なり、と
も、今も其の事なり、其の社あり

自性院 浄土宗

松葉山と号し、自性寺の末寺と博多石堂にあり、松葉
と入くたの方とあり、定宝八年、高魔王と安産
の人の名んまるといふ

セツ辻

箱崎松葉の末寺、其の方、箱崎町と海にあり、其の事なり、と
あり、其の道、其の横セツとあり、其のセツ辻といふ、其
まゝ、妙見の小社とセツ辻のあり、其の字、んたんじ
といふ、其の社、其の袖の、其の事なり、海にあり、其の事なり、

入江今八圃とありたり。

堅糟

大邑之東西ニツラツクれて西村と云古昔ハ村ノ温泉
あり 今ノ東光院宮殿あり云 是誠藥乃湯と云
之側ノ大邑其命少彦名命乃二神と勅語湯
守れ神とい後世茶師佛ともつくと神と考へたり
東光院村の入りと社あり飛來権現と云神傳は
是別大邑其命少彦名命として初ハ温泉の側
と云と茶師佛と入習て言ふ楊と云や古昔神と
ありと云と女武行来といふ今も之を孫ありとの
と云女武家の男子と云く温泉の入りといふと云と贅

婿と云其家と云一むは村初を温泉といふ昔も
いまだて温泉ありて温泉といふは温泉と云
喝へ近一屋ノ村の名と云く其性といふと村の名と
なり又いふ飛來権現と社飲多ると云はる今
も飛來田飛來先をといふ田の字も所十所余あり

東光院

茶師堂と云和山藥王寺といふ温泉村の中とあり
在る茶師ハ傳教大師為朝の付彫刻と云と云常
と秘佛として五十年と一度開帳といふ茶師堂ハ平
城天皇大同元年と創立といふ又茶王寺の例と東
光院あり茶師堂と云る恒持所と云初ハ禪宗

として形光寺にありて寛永の末に任持月仙と云僧不
律として寺に任する事計り久寺に火をうけて出奔し
以時文書 刻号焼失せり正保元年 忠之云再興
より家士勝野長助後澄に命じて寺にせしむ凡八
月成淨て成就せり其後正保四年 忠之云命をて
福名に赤坊と名し其言の僧竟後坊と名し後一
此寺と改て其言宗と一 堂舎と改りけり其言古
某源より是を酒太子の地と云傳へり今其地
列に薬師佛と云けり其源堂に傳教大師より
以前 天武天皇白鳳元年に建てるより其寺と光
明寺と号し其源あるを其傳教大師の所又某源

馬出町

佛と化て流るる其前より在る佛ありて古某源と
以僧云獲系玉院の梅苑と詠り福仙果橋
才一巻とあり
若狭八幡宮の西あり所の長サ二十五丁あり
け西の入り二里あり是より 此所は東のよりより
石堂は梅苑より十二丁あり 西と那珂郡と一 東と和尾郡と一 八幡宮の西側
あり横路と以て那境といひけり馬出と号せりハ
昔八幡宮の神輿博多夷の社すて下向ありけり
はより供奉人あり馬出といふゆへに名とせり
其地は八幡和尾の境内ありといふ

妙徳寺 曹洞宗

今山と号し禪とて馬出村とあり千光國師宗西宗
國より傳り初めて住せしはもと聖福寺宗化の
方と住せしや馬出村の南と寺中町と傳へる
横路あり是より西國師妙徳とあり時宗より
去の居りしはもと其後宗西聖福とて移り
送者と今此聖福寺中と移りしはもと宗西の朝
の後宗西と良辨とあり宗西の禪行と振
てて叡山の講徒と傳ひ朝廷と訴へて亂逐せ
んとせし後と改悔と稱揚の傳りしや元亨釋
とて記あり其時此事ありし

これより

まゝの南とある村之今住吉枝村之一説と
古歌のいふあるは其宗のより見へしう物とて
集才のみとて形所形知々義とありけむ
るると是とすし事とて

新張りし中津川此山中近れ此の端とハナして
集材村ありしや衣衣ありしや此の端の
源重之

志賀社

志賀崎とあり延喜式神名帳と和名郡志賀海中
社之座並名とあり今此形所とあり
天文廿一年
大内家の

こころの聖徳村をその物語にふると信じて太平記の初め
て記し後人附会をうり此嶋を福島と云ふ海と三里西少く
あり海中の窟ありて嶋ありて南に例の民家多く田
圃多し其小務馬といふ枝村あり此嶋むじりハ近嶋と云ふ
也釋日本紀と筑前國風土記と云いていづく神功皇后
新羅に幸しあつ時舟舟來りて狗屋敷資河嶋と云
あつ陪從の中と大湊少湊といふ者あり皇后則少湊と
勅し此嶋をきりて火と求しあむひりてやと求得て來
る大湊日本紀應仁天皇紀と河童連
の祖大湊宿禰ともいふや同ていづく家ありや小
湊とて曰け嶋ハ少湊湊とあまのお連りけきり殆ど
口地といふ一是は依て近嶋といふ今記て資河嶋と

いふと云へり神殿の山多しと傳馬と云是ハ皇后
三韓よりと傳馬をいふ付けきりて異國と云傳馬あり
事と信ひあひりあり名付りて沖山衣笠山と云傳馬
の所よりありこれ成志聖徳の山と号し又沖社の西乃例
と竹林あり是と長生竹といふ是ハ神功皇后ハ舟舟と
立りてけきりて等といづく此地と卓ありて竹林也て
竹林ありてりてて武士と云ふこと受て旗竿と云舟
師ハ是と云く旗竿と云ふ又志聖民屋の西と云はり
ころはと云の旗といふ是を皇后沖舟陣の付け流りて
異國征伐の事付りてと宣ひり名附りて又其先と云磯
良河あり梁菴秘抄と磯等と併り細つるあまの山と磯良河ハ
伊勢とあり傳馬と云或は磯良河と併り細つるあり

即ち此の事久し甲名は... 志賀明神は石上を物と... 舟と云ふ... 又檣楫と云ふ... 船業の事と云ふ... 是の神の吾あひ... 大岳及那多溪の中... 皇居異國退治の時... 昔志賀宮大奈

ち一時の上... 祭具として土... 修りせし... 又多ふれ... 神切皇后... 信行... 神切皇后の... 帝と神... 破格... 永

舊事記... 山院... 元年十月... 紫衣の... 被... 云

享十一年大内修理を支配再興するも漸百二十社の
興立せしめて其館を終く久ぬ其後と志づく其礼の
りりく末社と亡ひ今終く其社残まり又本社に抄世再
興の後破懐と一と小早川隆景を祀りて長政公
入國の後又本社と改め祀せしめ今この社は之三石に洋
殿獨門あり又一ハ尚社神祇に長く居る者之家あり
大宮司別當孫宣是之三石に外祀官數家ありて年中の祭
と概りひり今ハ祠家の家もやうくお氏にひりく
成まりて今も今と昔ハ神祇は苗裔尚りて月々乃
お本社と概りひり今も今と昔ハ神祇は苗裔尚りて月々乃
へ難し申すも二月九日初詣供と傳へりて武射あり

二月十日孫宣座の社人海濱と河内にて香推宮に
献する事あり香推の条 四月三日の夜祠官等集り
神山の柳葉とて村中を獲るこれと傳ひり
黄昏より三の孫宣神の枝とてけ毎家して祝詞残
るとり哭難とてりり四月五日獵漁の儀式あり四月六日
勝馬大明神と御供と傳ふ二月十日社人八乙女等
神庭にお集り礼終りて神田と耕す儀式あり
五月六日神田と植る儀式あり六月晦日夏越の後あり
七月七日恒例の大祭あり此日をよりして多し
河内商人おとれり物と持集り村中市とて九月朔日
神殿に任連とてりり四月五日神輿とてりりて内殿に枝

一重の九日流福馬を此日申さるハ橋樂と祝ひひつとも
寛永廿九年八月廿九日事々々宮ノ刻ニ此社の神輿
渡沖まで長宮へ移し奉る路次の行列もまづの祝成り
より渡沖の道より人家へ死の標ある所ハ此事とやら
信らひりし七月廿七日等しくは國人のふりもやうて
亦多々多く商人市となりて渡りきお祭多うけ外月
月此山おあることごとくつらりたれはるるん社傍の
坊と金剝山吉祥るといふ禪宗よりして承天寺の東寺
ありひり一聖一國師いざ天台宗よりし付け地と外
りて法と説きしと社人等為依信仰して列南坂平
知家より男子宗岳を以て國師ハ男子よりして宮司

坊といはる後國師入宗して禪宗より為せしことハ宗
岳と亦禪宗と成しり此の承天寺にありしこといふ
凡て此の古歌と多くある名をさすこと且志賀の海
人と其なること

万葉三
新勅五

志賀の海人めりて焼やき焼あつてこれ小根もさるもんあつて

石川サ郎

日七

志賀の泉即ち均丹れ経て下して心おひてきてあまき

日五

志賀の海人の流やき焼風といふこと此の流て山ノ柳川

日四

志賀の海人の流やき焼風といふこと此の流て山ノ柳川

日三

志賀の海人の流やき焼風といふこと此の流て山ノ柳川

日二

志賀の海人の流やき焼風といふこと此の流て山ノ柳川

志賀の海人の流やき焼風といふこと此の流て山ノ柳川

四五 志賀のやしろの口とありはやくはりのかゝる也ともありするも
 万葉四 草枕張りの君とありくゝたはひてをまゝとありの候へど
 四五 大船の舟に人ありて志賀の若男とありてありやと
 四五 志賀の山といふまゝとありて 志賀の山といふ所の山といふ
 志賀の浦と候する所人衆人の浦とありてありてありて
 志賀の浦と候する所人の浦とありてありてありてありてありて
 千羽破りの沖海とすれどもつとて志賀の山といふ所の山といふ
 け外諸集とのせりてありてありてありてありてありてありてありて
 と記さる

文殊堂

志賀のやしろの西の側とあり古昔經山寺より文殊の本
 像及五臺山の画像は志賀の山といふ所の山といふと堂とあり
 て安置は之後大藏經と候しける文禄二年十月
 四日大災おこりて文殊の本像大藏經の内ニ子余を焦
 失は其後本像は化りつきつらつ飛經を焼跡とて尚
 子余を今も有りて文殊の事東海壇を集と載り

筑前國續風土記卷之五

那珂郡下

千賀浦

弘浦

勝馬

敬言園

藥院

庄村

那珂川

高宮岩屋

興宗寺

百冢

大鋸谷

大休

野間塘

潮烹塚

東光寺

劔冢

午時講

那珂村

白水村大塘

伊牟田原

上敬言園神社

山王權現社

庚藤

若久

屋形原

春日神社

春日原

小倉

岩戸河内

院使寺

花攔社

後野

南面里

戸板越

迹敬言園

裂田溝

福園村

福園大明神小鳥大明神の事ハ既云

いしへ福言所は下りてありし村と名付しと云ハ
福園大明神福言の地多々此村の名とせしやけ社と今
の宗院村の地に移り事既云福言福言社の事載
り今此村ハ別と産靈の社あり福園の城も亦丸
く東を福言村の境内に福言村の上と丸山と云山
をけ山のまわりと経一人許の壺其敷二三百坪ありは
くありてありしりそ靈を福言と名付して宗院と
せりあり内ハありし代時いふありしと云事
と知しハ常陸國志曰寛文三年の秋常陸水車磯
村ハ古塚とありてきて石棺と得たり棺内ハ甲

冑太刀を種々の器あり塚あり百間ありあり
皆陶器と埋あり宅地ありと垣と云る此の
よは又同一類あり

茶院村

△此村ハ今茶院所あり福園の城と茶院ハ後
彼地ハ所と云るは一時今の下に移る昔異國より傳
多し舟の着し時茶草多くありしと此に茶園と
指し植しはり茶院と云し里人より茶院村の
上の山と古雲山と云け村の前ありハ海入し作地成し
火後屋れありしと云ふありけ村の社も山は
寛永年中焼と多く焼ありし内と朱多く入て

水神の相殿と云すは小鳥四神ハ中なる今此郡
の神と一社とありし以て元来水母子なる以て此郡
明神ハ相殿と勅請せし成りし地乃此社ハ此郡
明神なる以て多井の額とて此郡大町神と云なり

彦村

いむも昔を今此橋台早川天神の社を云ふありて
彦の彦と云 長政云城と築むいし今此地は橋
物とも此橋台ハ天神とて彦神とい

那珂川

日本紀ハ澁河と云なり此川ハ源早良郡皆振山の
麓又此郡五箇山のおく大野より流れて出て那珂郡

の中と流れて増多の西福園の東と云りて乃程六
里と強く海に入る川れり二十間或ハ三十間
ありて彦狭より又早川の形系若久村より流れて
平尾と云てちとありてむりの彦村乃境内と云
那珂川と一ツと云る小流と云り

高宮岩屋 興宗寺曹洞宗

高宮村の西南十所山の半後とあり窟の口南と云
内と云の間あり彦村各方一丈高サ口穴人申と云
とも一丈高サ穴穴人守其の西南大磐石あり佛
像と刻りし中位を添陀た者と云言勢至あり
之何奇と云して凡これ及るる亦この國中石窟多

しとてふりくのみく大行ふははし 民俗宮觀音と云
志之公け觀音と祈りてあふ事と云 效驗の御賽と
窟の前と指敵一宇と祀之とあふと家後流しと
と長圓寺の僧法聖窟と修補し指敵と再造し
石階と築之階より一寺と建之して補陀洛山奥
宗とす奥宗と元を聖徳太子初とありて言
倉色龍昌寺と倉色近世廢跡と一法堂龍昌寺
の同道と寺号と奥とくけ地と再興の法堂と
丑山禪師の法嗣とゆへ元禄十年孟春丑山と
清と法堂と宗祖とし 東林と同一く 彰て加列

百塚

岩屋觀音のお山れなきはあり 平尾村の境内あり
是又内と云ふて南と向りて三方サカ我を在
ありて南より北の方とあつてあつてと教多きあり百
塚と号しとせん昔福島の城と築あひついでと
こわりて其名と云へる崩と云ふも多しと
平尾山とむり石窟多しと云ふ又福島の城石垣と
築一時的に名多くを崩し石窟崩と云ふと云平尾
村の中と一木樹とて大なるはあふは嘗てた近の時

志り休む所はと云はれり

大鋸谷村

福長城の南より山向より 長政公入國の後大鋸谷と川
匠とと云ふ所の名つくは後其東南に谷と人家多
く出でて所と云せり其谷とも新大鋸の谷とい昔大
鋸谷と名つき一谷をも人家もて古大鋸谷と稱は
谷の名おのくはさきり郎民家つゝありと云き 又けおの
方山谷れ方を山にとい氏家多く出でてり

大休 鬼火付

大鋸谷より西の方赤坂山茶園谷馬屋谷のといき
大休とて樵更れ坂と越へて擔物とおわしむる

休む所より登りて東にお三方と眺めよるは
のりく山水れ氣あふるや 希に記と一麓大山の風
系といひて天下の名きき瀬戸明石初弁の浦天の橋
立岩崎はこれ佳系といふもあはれは是よりい
又此をよん本松といふはまきまきといきしは松を飛
せりて或はさく或を下りて定るはあり 出づ事多し
必しも毎敷えゆるはありは是古昔よりありて
福長公の昔に常とい別一事ありありとせし
其水のいよりのいよりの國中にはいよりのやよりの
他ありしは難多し 麓後玉高良山のいよりの大河内國
相系の一火ありしは難ありしは郡治惠村のやよりの

是より仰りて固てその宗の村屋山と光あり高村の人
を下りて言ふとあり開普の山の名亦光宗あり
地より發し高く上りて下る是其山と申と洞院と申と
とて多し耶武の張橋と云者岳湯と云ふより仰りて
光宗ありと見ら其後漢人といふに於て一々の洞院と
洞一得しと先儒の云原官中火とありてハ別連曼と
して火落る事教一日の年山中時と光ありと云り地
境圖と云黄金の宗教火光と又兵死及牛馬の血よ
く燐と云ふといふり明の李東璧曰野外鬼燐其火
のいり多しと云り炬のいり或ハありたり或ハ散ら俗
鬼火といふ或云流血の燐光と又関右記等曰火の

怪と曰遊光今案つてけさハ遊光あれハ火の怪也一
是等此説よりして是と云ふといふ山中と云と坑屋宮のまじ
よやまといふハ幡の記の文福弘安の村蒙古人あり赤坂
大塚谷の西とあり 是より合戦し多く人殺す事
ありけし時のいふに其後もけさして戦闘のいふ
ありといふこと知るに此はの境内と甲塚と云ふ
と云ふに云ふ事亦左の戦場ありといふに兵
士の血れ燐とありといふ事もあるといふ

野間塘

野間村より西の方若久村とゆきそとあり野大に觀
言の教所ありと云塘と尊とあり

潮煮塚

滝京の境内よりして三宅村の山より一ハハをきて潮
煮り滝とやまうはるのハ潮煮塚と名づく滝京の山
是よりしての名なりといふ又いそりも暗煮ハおこ飛
出たり幸く見まハ其大々大鏡石をもち近付ハ少く
いり多くあるを飛出事言ふ二言許りより連
るつあきつた矢の如く義嶋滝京住吉江志言ふ
るい般村の洞と飛りつて人近付ハ忽燃く又をく
又ゆ或ハ二ツニツとつきて飛出事あり

東光寺

けふいハ東光寺といふ寺あり其村の名ハ本ハ般村
の内あり後々つとていけ村産神ハ吉備は宮あり
廿社のよりいふことと東光寺といハけふ則てまじ
又廿村と大日寺あり本寺大日あり是と申れ大日といふ
凡悪民瘡瘡と疫鬼ありといふなり一瘡瘡の神と
稱ハ瘡瘡と賣場と悪民とありまじりてい佛と瘡
瘡の疫鬼と拂ふといふ悪民是とまじりて信作ハ出見
と携へ負て糸語すといふ多し群とありり民俗言傳
より此大日と申れ大日といふ事一といふ本と以て大日像
とニツ代りしと其在本とて代りといふ宗像本本の大日
あり本れ来りて代りといふ箱屋部須賀村とあり其本
れ申りて代りといふ別け村の大日といふ本申来りてい

村の名を以て今東光寺に別那河村加し此
河の名とも別那河の大口と云ふべし民俗の云々
河と云ふを以て吾合より確りなるべし
俗の云々を事なりし信一雖も此大日堂
寛文元年甲子に今此堂のいりこも
後寺にけし吉徳は神主なり大日堂は此地を借
まかり地を以てあるべし

劔塚

東光寺村の田中といふ隊の二横二間あり長三十石
あり其所城のいりこも昔此世の町山才の
士の安富とせし一隊といふ所を創隊と云ふ也
石窟あり入る事深き二石を尺あり横七人余入口は深
き七人ありといふ所を記岩屋あり只南に向り是又上古
家たき時の氏居あり

午時講村

を代講で五十川と書くしり午時講と書なりか
事して其故を失へる事多し右の名より七人
しり此河を午時講と佛經と講せしり也

那河村

那河ハ和名抄に高野の御名といふ今ハ一村の名といふ初ハ
東光寺村也村也那河村の内あり後多して三村と
云ふなり凡御の名村の名を以て吾郡の名とせし例也

富くて二十坪の瓜圃あり瓜とてありて宜しと云又い
村にひりより鬼火をきて夜にゆけ村より出て四方一里余
飛りくる四時時々人ゆきく見せしむやと後松の如し
をつけハ蠟燭の火に似しと云り或ハ白あり或ハ黒あり
三つあり並に飛ぶをくきて見せハ水晶の如くして
光るあり

庚 藤

麦野村の境内西府江邊の瓜にまきくあり後のお長く
して尋常れ後と習より其古樹ハ元永れ末のとし枯
ろと云々と植付く人々も例に常れ後と植付
けりへの藤を極く大にして松樹と懸り福をまきく

ゆへはそれ人呼て福り後と云りおのつゝはのちと
あり人々福り後といふあり

若久村

村より南に住吉明神の社を其南に東上と彦平の地
ありと昔神切皇后異國よりゆせむひり付けし住
け此社と立させむと宣ひり此ことや一説ハ百
年ほど前の一所の富民住吉此社と建んとし此地と
ありしころも云若久村の境内と近年 国君の苑を
築ふあり

屋形系

むいけは千葉の探頭れ居宅をり屋形系といふ

之宅北流あり四方に塚あり彫要害とありせり田の
中ニ棟樹一本あり其下の田に字と岡原と云は昔
大友氏之舊地と云ふと見えしと見えしとあり
杉系村大平寺之暫く逗留する村家と見えしと見えし
今と見えしと土境狭きなり村の南に箱の池とて大成
池あり水清く深し凡村及久の谷を源頭と
きゆへ早晩の患あり居形系村にあり杉系村と
うしろの山より谷川流し出ても榎井と流し出ても
け方よりあり谷川流し出ても榎井と流し出ても
へきやうと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし

春日神社

春日村の村の名と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし
境内廣し社前池あり林木茂く見えしと見えしと見えしと見えし
最もし眺美華盛なり用付遊覧するに堪ふ
宮所ありて村邑と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし
るりといふ今も田に字と深田と見えしと見えしと見えしと見えし
田と見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし
出して九月九日の祭ありと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし
ニヤニヤ神前と見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし

春日系

春日村の村の下を春日村の内に入ると見えしと見えしと見えしと見えし
南山十二丁許ありて平系と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし

こゝて廣き其地是れにして性ありきありて五穀之宜
しかりけり田圃掃之難給の隈れ少りけり系とありて
美院へゆく経路ありをし中居と云國中の廣野と
稱し之れ一安野也二怡五穀并京の西れ也稱才三
といふ事り系なりけり

小倉村

この村れさき岳の上と大あり墓三十二ありはくはく敬
せす是とありけり其内を古墓と稱骨ありけり是の
時人成葬りけりや一と云

岩戸河内

片繩村より上安徳村よりして凡十二村あり仲村五郎丸

松本今光道吾後野東隈西隈安徳中京権系片
繩ありけり十二村あり仲村の現人大明神と以て奉神と
以凡河内といふを一谷内と稱村連ありと都て何の
一凡河内といふなり

院使寺

別は村の枝村あり今此で井履と云お傳て曰元明天皇の
御宇和銅二年と脊振と住と一各涌湛峯上人院宣
ふて是れ事と是ハ太子れ沖御加巧の爲とを言下
りて湛峯と詔と應して 帝廟とありけり其時院
使れありし寺ありけり院使ると号するなり今も
寺と云く成りけりといふ所と云院と號言堂所也といふ例と

湯養上人の本像あり

花欄社

河内村の枝村杉尾といふはさう文明の比けは花欄と云山依り剣術の上より且幻術と修行ありありや一き事といひ居りしは幻術を以て人れ妨むるへき者ありとて斬飛を行ふ言ふも花欄といふと心得ていさしは剣術の才あり或は云ふも是は子良部田沼村の者には百ほど招て花欄と討せたり或は云ふして先花欄右の腕と云ふは花欄いふとては命といふは師といふは飛遊といふは首と討せたりと後果して或は親見牙をほく是難し

このり或は是より思て此は社と建立し花欄の神といふ十月廿日祭り又杉尾の系と云田の字を安徳天皇岩戸の少御大藏権直といふ行事の付御通と出しはありといふ

後野村

此村は圓通寺といふ古刹あり大寺なり也飯食寺産と附し一々書村民の家も其は圓通寺あり大楠本といふ貞享二年の凶嘗此の枝本といふんと切らるる根をむきと下り石を是とけりて見たり其も又石あり灰垣土と是とつりて石棺ありと申し人の體骨あり内と朱とて造り朱

變りて彩色と云ふなり其朱白斗いりて石棺の内
長六尺横三尺許り石の面は文字も無き事といふ
人と葬りしや知難し唐土の葬りし誌石と名を記し
て埋むる良法か其例は石の小櫃と云ふ是も後者
の墓なりと云ふ

南面里村

山田の川向の西に云ふは村あり山田の邊より是れ
くは田と云ふ地あり村南に向へり名はつく南面
里れ名はつくはとも和泉國大和郡牧尾との邊に
南面里といふ事あり

戸板敷

南面里村の校村に戸板といふは村の入り口あり
一少ありは云ふは岩戸といふ事あり柁の廣さ面は
或人ある大岩あり民俗の傳へて天照大神岩戸に籠り
ありし時麻の片戸とて名は片戸大和國宮戸村とあり
明神といふ云々のやうに俗に多き事ありは是れと
辨すなり及んば奇異あり大岩ありはいふはより里氏の
岩戸といひ習りたる成へし岩は西にあり向へり其面は
大日の佛像を彫りしり坐像に其面は一人一才あり
け岩戸ありといふてい下なる所と岩戸と号すと里氏に
いふ事ありは此村山田村の邊に岩戸といふ名は石の
前より小社あり里氏権現と稱すなり少き茅師堂あり

うしろに山祇ミナカミの社ありけ寺の産屋あり此山の脈
よりとふるに郡板金村へ越えたる是と戸板部といふ
けその名大石多くさゆくその形と似たる岩あり巖と
枝をとりよはるは是より郡形打部れ臨あり南西に
け下りゆるるは坂のなる長く山高し嶺より南の
方板金村とちりては坂じきし是を以て板金の地を
いふ事と知ゆべし

迹跡圖

安徳村より今ハ沖浜の系といふけ巖の上より岩戸少つ
系田種直の宅のありて種直の五代の祖種資の時より
なると住たり信五郎の祖
のありて詳あり 壽永二年ハ秋 安徳天皇

本曾義仲よりなる蒙塵しむひ平家とともけいふ
ちり暫くなると住り其行宮の址け系の内より平家
物流りと平家ハ能事と都と定め内裏化じると
公卿兼義もいふとも都といふこと定りけ 主上ハ
ころ岩戸の法大飛種直の宿少とて申くはると
るはけい所の事と岩戸の法とあるは流あり種直の時ハ平家
少武より少武の名名少卿と云ゆべし
皇居形のしく比さきよりなれハ大臣殿よりけいさく
人々安堵しむひよりなるとあるハ即けい所多くしけ系
の内と沖浜の内といふ高れ字あり一所詳あり土地ハ
つきよりかきし是 安徳帝皇居の址といふ近世

永祿元龜のころまでハハ沖河の内の園と築地と
又と邦の宅も各一区と築地多ると也也
土民も圃ハ妨りとて是と崩せりとれも今と於
築地のありし形はとて一張とりといひし也也
村よりさき事ハ九方りり其上の平多る事恰も甚
盤ハ西のとく唐と東西百十千とり南北百十千とり
許あり富九丁余とり四方ハ山とつりと下のありと田圃と
山中のややのと唐半の地他とありとハいふとんんいふ
の西堂城を布とて三修又四の平系といふと一張とりといふ
はありとりともちちつけり是ハ東田氏の形也也といふといふ
是レ東と裂田の溝ありし神切皇后といふとありといふ
時雷のとりきおらて溝といふと一張とりの園ありといふ
りきれと名付しレ日本紀神后の紀といふといふといふ

里民只沖河の系といふとりきの事と知りし
又と東南北各りり山多る事ありし裂田ハ溝といふといふ
是と小園と号すといふ

裂田溝

安徳村の巽乃方龍神の城下沖河系ハ東の名とりし
ありし日本紀神切皇后ハ記といふ皇后神教ハ記ありし
事といふといふと文と神祇といふと奉りていふと西
といふとんんといふと神田といふと定めて細といふと時と
灘川の水引て神田といふと思ひて溝といふと堀といふ
迹跡といふと乃といふ大股名といふといふと通ひといふと得す
皇后武内者孫といふと剣鏡といふと神祇といふと祀す

一めて溝と名す事と求む別す。雷電を御慮して
之を流れて海に吐せしむ。其の人の其溝と号して
裂田溝といふ。日本紀に云く。東國のなかり。大岩
の上と水の通るあり。日本紀に記す。雷の裂る
はるる。一。之を此の方と名あり。一方は田乃申と嶋乃
かくもて。之形。龜のこ。少く。龜嶋と云。其流
ち。岩をほとと堀切。其の深。余も。こ。堀る。大溝
岩。水。面。を。し。ほ。く。より。空。を。穿。つ。る。水。の。深。さ。こ
ん。守。或。い。え。ん。わ。と。あり。溝。の。廣。さ。こ。ろ。半。或。い。こ。ろ。あり
け。溝。と。堀。通。し。こ。ろ。亦。廣。く。深。く。して。以。て。長。く。人。力。の
こ。や。く。及。ぶ。あり。あり。是。等。神。御。皇。后。の。耐。を。す。

せまへ。溝あり。け。溝。の。水。は。よ。ろ。山。田。村。の。一。の。堰。手
より。流。る。其。形。嶋。の。こ。こ。地。形。堂。あり。是。神
御。皇。后。と。名。す。る。社。と。して。地。形。と。附。合。せ。り。ま。い。ふ

安徳村

沖はの系れ安徳天皇の行宮のありし。其のり。ま
村あり。か。名。付。る。行。し。安徳村。其。枝。村。風。子。と
い。ふ。こ。ろ。ある。井。は。此。廣。さ。二。千。七。百。あり。其。上。の。側。と。風
子。側。と。い。ふ。風。子。大。明。神。を。風。子。の。土。神。と。い。ふ。は。同。名。井。を
と。ひ。と。い。ふ。事。あり。

山田村

迹部國の南。山田村あり。迹部國。其。南。北。山。田。村

一河内あり平田之是山田村の境内之山中ありては
ろくして平あり又平田のこゝ一良田之凡け村中土地
肥壤として多く菜蔬と化る又け村の久四ヶ畑と
ゆくそ乃西あり田れ中細長き塚ありむじいあり
町也合戦あり一付體と垣と一河といふ

一堰手

山田村より一是神切皇后のほせむり一割長田は海
の水よりけりといふと河と古なる田地とそをて神田と
化せむりといふ 神后のほせむり堰成へ
井の底より八十石あり大井のけりけりけりけり
おろくそりけりの大井の又けりけりけりけり山田安海△

東浪仲村五帝丸杉本今光七村の田地百千九千余
石此井よりしてころりせり

伏見大明神社

此社より肥前の川上大明神とある後山城國伏見
此神香宮と勅傳して合をあるゆへ伏見大明神とよ
相殿祇園神あり神體も本像として古し里人の白
じり博多焼けしけり祇園の神祇とあり
並ゆへ博多祇園の神傳あり一沖幣と以て
神祇といふ城別伏見神香宮を神切皇后あり
伏見の神産せはけり社と伏見大明神と号しけり
やじり一皇后けりて神田といふと農民と物け

裂田に逢と遊し農氏と志すせむひの後人是
と感して 皇后といはれし事とまじりたるん

鯨ナガ例ナガ

山田村にあり一井子のより此例に鯨魚多し昔
この尺ゆり事あり岩穴に中とありといふ天下國家
愛する所ハ必形を以て集るといふ天正十四年薩
の軍兵筑前と礼妨り前此例中とありといふ
とわく海にぬえ和元年大坂陣の時も又鯨出
る事おれといふ白鯨及鯨魚鯨とて鯨魚なる
形のこゝ背の白き鯨もいふとといふ鯨の
大なり事三人曰んく及へり寛永十四年紀前有

馬に緘兵おとす一町もせう物も初とされかく
駿しハおとすといふ又長安年 長安といふと
あひしう菜山田村と大なり家長と元はき一事と
るなりと地歌逐作せらるへき前兆も鯨出ると
いふ所の鯨一の井より上りるといふ神の供とて里
氏出ると井より下りてはまは神れあまは海とて
常れ矣のこゝに食せとあり

馬瀬

山田村に西あり川に馬の瀬といふに鯨例のより
里氏傳てて曰辨天百濟國より來りては時龍馬
と名けぬと鯨もなり馬の瀬といふは説書と

聖人の語ありて此と云ふ事ありて是より今世の事
神切皇后ニ韓より歸せむい少後山より上りむい
一付い徳と馬とて渡せむあむとわかれとて傳へ
りや天皇れ亦女天とて神と皇后も亦女神とて

梶系村

上りも村とつる上りれる近一四方と山と谷れ中と
ある里あり境内長さ二里許る氏信を傳へり梶系
景時々末系いあり住り多むと村の名とん大なる宅の
址あり是と平之屋敷と云ふ是系時々末系の存は

居宅なることいふ平こといふ者ハ長長のころ存りし
と云ふ

四箇畑

岩戸河内のおく山中とあり是又一河内とあり不入道
埋鏡鳴瀧一瀬此河村古ハ一村と南畑と云ふ今河村
とあり各々名を唱へていふもいとてて曰く知と云
けおく山と名く五ヶ山と四ヶ畑と對せり云あり

不入道村

いり宿振山盛なりし時と守護不入れ地とてありと云
けあり上り入くと守護不入ありしゆと名付りあるん或を
とて上りて堂と云置たりと云志く不入道の字ハ堂の字

とぬけし又此村の境田に瀧を流す中平をうらと
うらしき好景なり其傍に山を筑き堂あり山田
と不入るるの東に山の傍に大なる石あり

埋鐘

此村の中たるらうらにむしけ地にて鐘と稱する
と築鐘をいゆに鐘と地を埋けり是よりして其の石
と埋鐘と号し又むしけ世の可盜賊のわすれぬれ
らむしけをいゆに鐘とらうらに鐘とありともや

鳴瀧

此村の瀧をいゆに鳴瀧と云はれり成林と書り
村よりなる山をかくまき山と云ふ枝村に寺あり

こまはむしけ岩振山と信の麓をいふ今ふ高
となれり又は村及南西里村の山と石南花多し其
石をて鐘と云ふともや

一ノ瀬村

- 一ノ瀬村の上流を是より五ヶ山へ越る所川瀬をいふ
- 一ノ瀬といふ名村をいふははる後ら山前川向ひ
しをいふは佳景に絶しては谷川の音ありともや
- すし又此村に一ノ瀬といふ古城あり 古戦場の跡と詳
あり
- 一如水公の才田岩心村とト居りて其宅址程残
まり没後け地と築る河面ありともや
- 一ヶ村より五ヶ山の内瀬を村と云ふ中なる飛尾岩と

越り又山と越すして川とさうのちうゆけハ西を勅名
とてあり其處れさう十二さうもさう一其處とさう
早馬河川とを越さうさうさう余水の流し常と
越へんほのさうさう雪れさうさう一さうさうさう
名河もはさうさう流あり水多き時二流とめてさう
さうさう二下をゆきさうさう勅といさうさうさう
一河と並へり東れ岩のさうさうさうさう西の岩
さうさう九馬斗あり東の岩と梵字と刻ありさう
の流の割りさうさう一天上流あり又さう
二下さうゆけハ泉水とさうあり池もさう形あり
さうさう横さうさうさうさうさうさうさうさう

て細取村とあるさうての峽中れ山中の奇なる怪岩の象
物さうさう物さうも危嶮とて經さうさうさうさう
さうさうの王亀齡とさう山川好處造化惜不許世
人平地者と化ししとさうさう事とさうさう

五ヶ山

岩戸の川と深山の内五村ありあり五ヶ山とて細取道
枝折素れ河内大野小河内はさう一池さう危屋山と
さう山と南と越さう一馬五ヶ山の境内の川は物とて岩戸
一河内とし山と一河内とし山と一河内とし又五ヶ
山と一河内とし山と一河内とし山と一河内とし道枝折ハ
道さう東さうあり川向て東れ山と後さうさうさう里あり

今從て道十里と云 綱取と川の西段に於ては地
と橋多し ありて村の境内と席ヶ岳とて古城の跡あり
城と名知 龜尾山と云はるる 少東南の町とあり 兼
河内へ通るより川上と云はる河東之民屋十二三軒
谷
ありと云ふ小流と流れて東に南に七八町ゆけり大路と云
村と又南にゆけり 橋として大路と流れて乾の方
こへ七丁ゆきハ小河内といふ大野と小河内ハ谷町と云
大野といハ民家七八軒あり 橋と云ふ山の内ハ山の向ハ
口谷の内之紀前神邊郡西小河内の枝村と云大野の十
七丁南と云ふは是紀前龍前境之実河と云は是と云
是紀前へゆくは是ハ小河内ハ龍前より 亦云所と云ふ東小

河内村の少くはと云ふ 兎たしと云はるる 淵と云ふ 淵の上と二間
はるる 滝ありしむり 峠の山寺ハ兎虚と云はるる
勢よりておととんとては 淵の上と云ふ 大野と云ふ 推の本と云ふ 兎との
りせ 淵と云ふ け付と云ふ 取おして 彼兎水と云ふ 淵と云
死より あり 兎たしと云ふ 東小河内の川向のともむ村と
西小河内と云ふ 紀前の内之民家も 東も一村あり 是と云ふ 村
と云ふ 是のともむ 此國と云ふ 是より 是より 終と云ふ 川の
小川と云ふ 大野ハ 紀前内ありしとて 龍前と云ふ 西小河
内ハ 龍前内ありしとて 紀前之 凡國郡と云ふ ありし 是
山河と云ふ 是ハ 地 隔り ち地の風 亦も 同ハ 是ハ
人民の風俗と云ふ 事と云ふ 又山の 山と云ふ 是

して少なる河原とて或は少なる丘を以て沼とす
河も亦曰く一谷れ中とありてはもと山と号する事
由り多し一東山河内と西山河内と被しつす
流て男女朝夕は其まき風の字も亦異して
一久き國の風化とよき事や言流民俗も
東山河内と山神の社あり松をたてて
山と稱多し花の盛るはんくく山深き
為りくくやまはまき事十
来りてはもと大やうハ穀雨^{三月}の前二三
成りあり向いの西山河内の山とて松多
は谷中春の花とて緑松の葉をたてて
く山とて

九子部山

道枝折の内橋谷れ上りて山あり村人れ
俗もて法華經と一巻抄讀誦と志し地を
九子部とて其系といふ山とて塔をたて
と号し今ハ此山とて其系の三重の名塔
評もその風化とて宮をたてて其後之
所内經の澤とて其系とて其地とて經と

とよ一後とて一經とよ一傍ハ性空上人ありとよ九子
部山の北にやとて一谷河を一河のと飛尾家はと
流とあるとて山のこ一ひして左の方より谷河とつ
のよゆきハ九子部山の北にありとて一とあるとて一と年氏
家ありとて一寺社ありとて一ハ九子部山とて一崎はて
枝本ありとて一河とて一ひとて一河とて一河とて一河と
とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
より左の方へ一河のハ一河とて一河とて一河とて一河と
河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と

西畑村

此村ハ東部郡小笠原と高部河に村ありとの山申とて

他の村里とをて一離とて一河とて一河とて一河とて一河と
とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
村とありとて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
谷ありとて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
物申録回とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
左谷とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
山祇ありとて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
茅毛此馬とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と
権現も志とて一河とて一河とて一河とて一河とて一河と

湯の山信濃國と月ノ里おある

席田郡

此郡と沖之郡那珂郡糟谷郡との界とるさ向り
西申して有少なる郡あり唯八村あり一は村居東の山に
ふちとくもて南少く列せり定数武二十ニて曰凡郡
不得過千戸若餘五十戸以上者分隸此郡地勢不
宜分者随状立別郡其不滿百戸者隸入他郡若
不得已而應分者別録申官篤信いそく溜芝田
郡ハ云少くして那珂粕谷沖之とつてもう地勢と見
まはらつへさほとあふこれとも古に郡とすも大に

此郡のちの郡
又席田郡とある所の戸数と加へいふと
さかん事と恐きて戸数少くれども別とい郡とをら
うとせん其のとい郡ハ云少くも一古今著同曰
經信卿太宰師と任して下向の村、月十五束と流
希國芝田溪と云うけり天晴月明くありと
難の前とおもころ概とく枝葉不廣くうあ
ひく月残満たれ人とりあつて忽くこまなと切り
拂りせ月とむらひく我もすか理以智とかきありし
て心残とすしてめあまひしこまなと切りからす人
も今ハ云さ世より多し篤信曰芝田の溪より一は郡
の西りつちとありとや今ハ云は知まひと月隈

とら河彼經信々月と見えし一にあらう大なる楸の
本ありしや著國集とある一ぬきハ楸隈とかなり
一と後と記して月隈とかりや月隈ハ此郡の東北
とありけはむじりの名ありて宿禰とありや

和名抄と載り此の御乃名とあり

右田 大國 新居 あり今名も一つもつたりん

今移り此の村名

下白井村 上白井村 青木村 平尾村 上月隈村
下月隈村 之華村 金隈村

金乃隈

津島郡と席田郡との境を津島の中村と金隈との
間にあり村の南に尾隈とてさき山より出たる尾を
さきとて宮塚多し其間此谷の奥にも宮塚多し南
の山より上りて是處に古く宮居せり旧址ありしを
ら名と傳りてさきゆへ窪多しゆへ又金隈のさき山上
に石鏡とてさきより見えたり人おれ鏡とらつん
むくひて見れらうつんは西平とて光りて名
さきとて人余横一宮跡とて石鏡とて人ありは元禄
十四年三月惣更さき前と傳りてさきと見えたり
まより一月の男ハ人多くて川中きりは是處
石の類ありてさきとて極多しやうの石鏡上座郡

菱野村とありと此名の事菱野の河に詳に記し
山城國鷹ヶ嶺の下とあり

筑前國續風土記卷之五終

筑前續風土記卷之六

市差郡上目錄

- | | | |
|-------|--------|--------|
| 竈門山神社 | 太宰府齋堂址 | 都府樓址 |
| 學業院址 | 觀世音寺 | 戒壇院 |
| 山王社 | 松峽 | 太宰少貳宅址 |
| 有智山 | 南谷 | 北谷 |
| 湯原 | 智光寺址 | 愛岳 |
| 大石 | 四箇畑 | 佛頂山 |

統りし河多れハ太宰師下敷多の府及属交はり
 少人き派古蹟墓のこく布き星れこくつるまきり
 土地する東西之高峯連り海へ南や他郡の平地
 通せり泉清く土肥り古代の名風や氏俗を
 しくし

和名抄に載り河のけ郡に郡の名四りあり

市皇 太宰府 長園 村の名 次田 大野 西王寺山の西の麓

田村の
巴とよ

今移り河の此郡に村の名

西小田村 隈村 本堂寺村 下見村
 油湊系村 香蓮村 園田村 天山村

| | | | |
|------|------|------|-------|
| 吉本村 | 葦城村 | 牛崎村 | 山家村 |
| 宰府村 | 系村 | 北谷村 | 原所村 |
| 續分院村 | 汁摺村 | 二日市村 | 園分村 |
| 通古聖村 | 坂本村 | 片野村 | 観世言り村 |
| 立明り村 | 上古聖村 | 武茂村 | 井上古聖村 |
| 塔系村 | 松塚村 | 長谷村 | 常杉村 |
| 徳田村 | 筑紫村 | 内山村 | 系田村 |
| 山々村 | 平等村 | 紫村 | 畑造村 |
| 萩系村 | 中津村 | 仲村 | 山田村 |
| 尚井村 | 尾田村 | 白木系村 | 水城村 |
| 上大利村 | 下大利村 | 牛頭村 | 乙金村 |

向佐野村 吉松村 大佐野村

竈門山 いしと福島より二百里宰府のちあり五十丁
を勢山と云ふ二十丁あり

いしと國の中央よりして最よく造化神垂のあつま
まらほして神皇のあがりやの地をさへ凡藤葉のまは
惣信守ありと云々峰高く海へ雲霧ふりく霞の
煙をさきくく入山ゆへに竈門山といふ又伊豆山とも
いふ太宰府をいしとりくもゆへに伊豆の里といふ此
山と宝満とも號に満山岩多くして其形勢良
上の割りなせるゆへに祿のあはれの地と云ふれ名山
とも唐書に記しとりの山に云ふゆへにいしと山と云ふ

まは一瞬のちとて数百里のちとていふもていふ山のふ
あつとて後一列の内を國と云ふと眼下二丁の山あり
ありあはちとて波野馬と云ふとていふたうに秋天清歌
の時を知れ新羅の山と云ふゆへに思ふに波の廣大
なるありゆへに山中にまは福島多く秋におもふ
しとて既するゆへに塔と云ふゆへにのちとて愛
然のうらりき事記ありし短き事とていふ
こもとも備前の地と云ふて山とていふ人希らまはは
あはちの名山なりと事と知る者少き事とていふ
いしと伊社とて是則竈門山の神社也延喜式神名
帳に伊豆郡竈門神社一座 名神大 と云ふをりあり

その神ハ海神乃女王依姫あり 鷓鴣草葺石公尊の
沖后あり日向國高知尾岳にて 神武天皇と彦彦
ひて後竈門より入るやとや相殿の神二座ありたハ
神切皇后右ハ八幡大神ありかゝる名も山々ハおのつゝ
神靈のすけ理あり況や又沖祖ニヤの神ハ徳産ニヤあり
地を造らんと作さざるべしして之靈跡も亦ありて是也
つゝあつゝ十月初午におれも峯のひらゝと岩穴あり
天然の井泉あり東西四百余南ハ三たつゝつゝつゝあり
清濁ありて常に増減あり人此水と氣と移るハ老
翁を社ニヤのつゝありと益氣井と名つけたりと之社
家の説く往昔天の神出胎の時に水と用て浴しあり

と云傳ふまゝ人々鼎の是れとて持る石ニツありと云ふ
一文余三石の百二文許あり人々と云ふと云ふとて過さるは
と竈門名をいふけりて湯とわらゝいふハ谷名谷のふ
と石ありて靈石あり谷のふと石又 應神天皇秘傳
宇治村にて生まむひの時此井の水と汲んで産湯
とてむらゝと 沖社を山のいつゝと云ふと云ふは古盤
石のうゝと云ふ成言と向へり甚尊嚴く人々ありと云ふ
山とて山々もそのハ秩索と云ふ三ノノ攀登ハル 秩攪ハルとて
本社の山々も思ふと云ふ大岩も上り下り下と云ふハ
危くして魂と消す山中七ツの岩あり法城 福城
岩金室宝塔 岩金 此ハ神靈ハ窟宅する所と云ふ西岩室 南妙
峯内の窟金蓋也

災水あり潮汐之應して進退ハ其外獅子岩馬蹄
石をこしよ靈跡多し淡日本紀仁明天皇承和
七年四月丙寅筑前國從五位下竈門神と從五位
上と授けしむ九年秋七月癸巳朔乙未使と筑前國
竈門神社とを奉幣せしむ崇寧ありしとあり
文徳實祿と曰文徳天皇嘉祥三年冬十月乙巳
朔辛亥筑前國竈門神と正五位下と授けしむ三代實
祿と曰清和天皇貞觀元年正月二十七日甲申筑
前國正五位下竈門神と從四位下と授けしむ神位
の貴く
陽成天皇元慶三年六月八日丁卯筑前國從五位下
竈門神と從四位上と授けしむ中記あり醍醐天皇

延喜元年六月廿一日八幡大神の神託宣し竈門神ハ
吾伯母とありしむとあり是ハ竈門神と名ると
あふ事伯母の事思良の所事也誠ハ竈門の神也
お依姫おれハ神伯
母とありしむ口やれ依
婦とありしむと依婦と依婦後三条院の神宮と名系經流
筑前ちとて國之傳りしむと曰れいとく照久れハ雨と
祈り此神神と鏡と奉りて流りしむ
西ありしむの事やんしむハ水鏡と母思とありしむ那
共と新淡たんとありしむとありしむ中ノ者
悦ひありしとやけ授けしむ神殿と御色り江を
尺二寸二ありしむと故とありしむ
各寄りしむ山とありしむとありしむ降つら峯れら雷のこえとありしむ
大江匡房

現在集

朱橋

散乃くもえこせして色利なき電門の山入の橋のふ

道信

類集

家集 隆り寺に神皇正統記のふをたれはるのふまてさうてゆえ

拾遺集

十八のけりへゆるとなる電門山の昔もやるとは

下

のふとつけらるる

○

まをちふ人秋をこころのまを山 ちあもあ方もさうとを

○

え捕下のふとつたりはいつへの連なり

○

白川院應徳二年官府と下るまをなる中電門山

○

大神社九國惣鎮守不混諸社故寄附神領八十庄宜

○

懇祈 聖朝安寧とあり 朝廷より深く御書

○

崇あり事とを以て推るる一 堀川院長治

六月二日諸卿集りて是より先太宰権師中納言

季仲八幡司尚光清と同一て電門社神輿と村并

系徳法師とと殺害と一事と定め申十月と季仲と

流罪一光清と禁獄せしむると也 此事一白紙抄及

同御宇と詳元年十月三日 勅して電門社に二位と

授むる 勅使は太宰権師大江朝臣匡房ありと云

後土御門院文正元年十二月天下大に地震す一團一石

を御祈禱と行せしむる能前必に電門山におわくと云

行ふ五色綾を十端黄金を十兩と考入るる 天武天

皇乃御宇心蓮上人と云傳るるをてけしと御院と接へ

寶仲寺と云法相宗の心蓮上人ハ白鳳十二年六月

心蓮の塔

十日寂以佛頂山在尾寺に居にありと別佛頂山と
墓を佛頂山と電門山の少くありて電門山より一
と後漸く盤菜一と有智山南谷山谷之河の傍に
すく二百七十坪ありとやけ内三百坪ハ其後方と
寺經説と學ふ七十坪ハ其考ることと專戒切と勅めて
入峯と事といふもじうれ傍の二三少とありて眼
より文武天皇の御宇に没小角登山して石窟と
於て修法可いと云是こととて修徳道者けい山と以て
修法の場と一筑前豊前之俗といふと豊前國彦
山とを以て金胎と教といふと也桓武天皇延暦
廿一年傳教大師入唐安撫のころ此山して電門

神と祈り兼師佛七作と比り七ヶ所あり安道はけい
より愛して天台宗とあり叡山之屬にありん按る
△水鏡に傳教はけいして唐へ還んとして祈りて電門山
乃山寺と兼師四所といふとあり又叡岳要記に曰
奉傳云延暦二十二年十月廿一日左京府電門山寺におきて
四船平達口んをて敬て白檀像の兼師佛四作と作れ
高六尺余とあり今社家考れ云傳にハ七作といふゆゑ
七ヶ所兼師堂もは謂七ヶ所といハ有智山則智山の
申堂あり
上座那官野村の境内八坂の南あり徳波教土師村
那珂那津和村兼師と兼師朝日村日照寺津和
或為村武藏寺通古賀村東林と是也七佛兼師の
互列と又

一後より上座部南 延暦二十二年弘法大師雲山して西と
栴寺の下の記あり 竈門神と祈りい時多や弘法求字持の法と執行せり
まし河建福珠の窟乃より則求字持堂あり

嵯峨天皇弘仁九年四月傳教大師有智山寺のまを
おわて 寶塔院と云つ是日在國寶塔院のひつりあり

河内河内寶塔院ハ安東上野寶塔院 在上野郡 安南

豊前寶塔院 在豊前國 宇佐郡 安西筑前寶塔院 有智山宝

安北下野寶塔院 在下野國 都賀郡 安中山城寶塔院 在比叡

安總近寶塔院 在比叡山 東塔院 是より

大師六所宝塔誓願文曰

住持佛法為鎮護國家仰願十方一切諸般

若菩薩金剛天等八部護法善神夜叉等大
小比叡山王子眷属天神地祇八大明神藥王藥
園同心覆護大日本國陰陽應節風雨順時五穀
成就萬姓安樂紹隆佛法利益有晴盡未來際
恒作佛事

弘仁九年四月二十一日 一乘澄記願

一乘とハ一乘止觀院最澄と云意あり一最澄と
傳教大師の名なり

後奈良院の御宇弘治三年冬後小豆友宗麟
尚社寺院の傍前我茶園まて檢地せんといふ時の
座主淨戒慈祈しつるを書と曰

當社領二三年經叟不正方今檢断却而為幸
乎坊中三十町自注古守護不入一色左京太
夫直氏探題時奉尊氏將軍命被立御高
札近年大内家之下知又由之此等趣審一辨
罔乱舊政則可謂敬神之至也

初く言上りぬれども宗麟終るゆゑに其を智山
小谷中堂系世守りしより一と院僧坊に保役とか
け堂人吉乃破壊と好てそあをと墾て田とに給ふ
ふと社家神人の愛して農夫とあり神事を礼
ひて瘡り社僧法師の修り還り傳法修りと斷
りりしにれは三百七十區を以て僧坊も表徴して終る

二十五坊ありぬ今もその如の二十五坊は皆是の者方あり
寛永の始ありては京流方尚二坊ありて後亡ひぬ二坊
を若妙坊淨光坊是之凡竈門山の寺僧の中より傳
教のふれと傳へ來て天台宗こそ内行者方は役氏の
法と傳ふことも是又天台宗也つとも處山と奉り
永禄元年二十五坊の山伏一味同いて淨戒庵主と
しつるも寺僧坊も寺員保役といふも神事系礼
まゝ急りぬ流る所より門流も日々減が氏に論山
上より坊定と稱へ神意と稱して保役との意見
とありし熱訴しぬれは淨戒是と守りしと欲事あり
是よりして永禄年中廿五坊の僧流西谷杉尾殿と

後り漸く之を東院の尾をも居住んとして山伏本坊
高きくしつと山より右住人天正十五年の春 秀吉西
征より薩摩より沖をさうの時太宰府よりさういし
せりとの命して二層れを橋と二つありてさういし
なりは時此より小早川隆景よりゆりたり文禄二年十
月隆景山より檀宮司を急法中時より宗家余
海堂と於て西唱人け時隆景宗一白名考進して毎
年恒例とせりたり同年隆景宗一白名考進して毎
とてを人の良枝と集り多し工匠とほりて造られ
たり長二年よりしてはり年々神殿修殿海堂神
樂堂禱禱行者堂末社も古法のしく成就せり

石川寺居より建立せりは前神社佛宮傍坊まで
荒果たりと此時より形のみく再興せり長政公
入國の後山よりゆりたり太宰府より電門山の役
人と招き出りたり座主亡しり此法中隆景の時
茲より仲谷坊經實より禱して太宰府より考りき
り電門の神ハ古來れ多社ありハ社名三百名考附
ありと宣ひたり經實ゆり此法中よりし山中一層
集ひ論議して曰凡僧徒ハ衣食より足りぬは行法
ハ志よりゆるむるものには法中高君と法没冲亮
ありて十万人檀那誅福ありハ山中も續して修り
へくはん餘地ハ多用はりきり此議一何して

中々に傍屋等々申す交りたりとて之を焼く候と申
之後を夜に山あり之を焼く候と申す此の時の
事ありたり其外為意候了は元和元年又
長政公山あり先許ありとて神領寺附の事
しりけんは之を焼く候と申す此の地とて事
事進もて永く山中の事候と除くは元永十八年
二月講堂神樂堂禪徳堂行者堂一時に焼失は
是ハ山中根より神前法堂此處も野に如く
火の聖火入て回帰せり此山中傳承の佛像を
焼失は候とて此の候に位殿と比りて回帰の法
候とて焼失は候とて此の候に位殿と比りて回帰の法
候とて焼失は候とて此の候に位殿と比りて回帰の法

忠之公其家臣竹末之為吉田を奉り出候由申す
長谷川角兵衛吉田長兵衛村田兵助の命にて尚社造
立の事始あり是等の良材を集めて化せしめて三
年成就せり神殿方二拜殿三間講堂神樂堂
禪徳堂行者堂茶師堂禪徳堂亦齋也候とて
禪徳堂やけて是より此の候に位殿と比りて回帰の法
九年國主 綱政公又二十名の神領とて事附し
あひ合きて五十名の神田より上宮より東の所程に
子代宿りて二名の女同れ家も家れ事申す長徳も
是と長徳も此の候に峰入の所程に候とて
あり又此の外に竈門山より國主とて峰入候と

乃秋重出女等亦多此薦野山祚些山池田山田意
主手て秋家惣のきうけい入孝百年余の終して西海
首の廢せり

太宰府舊址

國分の東觀世音寺の西に築山と云小山と云此の田
中より大なる礎石多く沙道を是則太宰府の址あり
け里と沖を是れ里と云貞享年中つとねく觀世音寺
と再興する時多く其礎の名と取判ひつとて是もた尚
能石多し南に大門のあと少く於府橋のあと多しと
り大度乃ありとあり礎石四方丈人余多く柱
と云一は平よりして一尺二寸或は二尺ありと云り

移西府と云一も即此に古哥り三つむる所乃之なり
又都督府とも所の都とも之り凡て太宰府ハ此の
町よりおれり也と始と詳し世は日本紀 推古天皇
十七年夏四月筑前太宰府奏上言百濟僧道願
惠弥首 十人俗人七十九人肥後國葦北津泊と云是
太宰府の國史と云へる所あり是より依て是事と
始ておれり事ハ尚久しき事と云へん續日本紀に
聖武天皇天平十四年正月辛亥太宰府と廢せり
右大辨從四位下紀朝臣飯鷹等四人と云りて廢府
乃有物と云く此所の西司に付りて天平十二年辛
卯始て筑紫と移西府と置り從四位下石川朝臣加

美を以て將軍とし、卯辰後五位下大伴宿禰百世を以
て副將軍とし、副長二人、主典二人あり。同十七年二月辛
卯、復太宰府と置らるる。此府の眞廢者の如し
大凡當府ハ九列ニ多しと有りて、政治とあり、西方の
藩鎮として異賊の警あり、備へ邦を治むと防く
ことあり、おとそなることあり、ゆへにそを任むを重し。其上
官と師とし、是勅任の官にして多くハ有品の親王
と以て是を任む。親王は是を以て大樞師中ハ大武府
勢と知れ、樞師ハ細言以上の人を是と任む。又大樞師人
た遷乃、何時も樞師と任むことあり。菅丞相と
た遷の時は是を以て任むことあり。大武小武大監小監

大典少典大判事小判事大令史小令史大工小工博士
陰陽師醫師醫師書師等の属官あり、是職掌ハ淡
海名の比りあり。今の才一を是と見たり。又主神主工博士
土音博士主城主船主尉大唐通事史生醫師新
羅譯語、僅使おの小官。此府とて名を職とつとむ
けり。太宰府官人交代此事の國史と出たり。何れと
考ふると、日知録に、天智天皇六年、筑紫の郡督
府の事と載り。又同七年、秋七月、粟前王として筑
紫率と、渟人、八年、五月、庚辰朔、戊子、獲我赤
見臣とあり。筑紫率と渟人、同十年、粟隈王として、
筑紫の師とあり。師の名と用は、
師の名と用は、
同十年、粟隈王として、
筑紫の師とあり。

司是使於菟紫太宰府其時より既之太宰師と下之
也一之 天武天皇五年九月丙寅朔丁丑菟紫之信屋
恒王飛多之出佐國へ流さる 持統天皇三年八月辛
亥朔丁丑淨廣肆河内王と以て菟紫太宰師と人同
九年九月壬午朔癸卯淨廣肆之聖王と以て菟紫太
宰師と稱はる是より以後續日本紀日本後記續日本
後記文德實錄三代之實錄凡五國史之載之河内太宰
府大貳少貳以下其府及所任之事 馬として多し
且三代之實錄の後 宇多帝より後太宰府官任の事
公卿補任ののきより人いふり久きをれはるき
てあるは凡太宰師と任をる親王大治の都に在て

主事と司り之他より其事も多しと見
へし是と違官と云之 違官ハ太宰府友人之
記にあり 大納言源
經信卿ハ堀河院嘉保元年太宰檢師と任し七十
九歳と云は地より承徳元年太宰府とて卒せし時
年八十二人詩歌兼法と進より之墓太宰府に於て
一進の後形乃父より進二子九月中納言太宰匡房
と右宰檢師と任して下向人故之匡房と河師と云凡
諸國司ハ之但四年五年と以て記すとせし也續日本
紀天平宝字二年七月勅瀬年國司文智皆以四年為
限又曰寶龜十一年八月大改官奏菟紫太宰遠飛邊
要官人相替限以四年前事高量甚不穩便臣等

望清官人歴任増為五年志くれ、筑紫も太宰府を
五年之非、官年之良吏を延任して、其事を以て、
あり、凡太宰府を、兵備の防禦の、こち、じ、
とせらる、故に、兵士多く集り、且武備の、こち、
く、彼地、集り、事、歴代の史、見、
天皇大宰元年、甲斐、
持ら、一子、二、
もあり、又太宰府の官人、
蓋あり、
二年八月十七日、
日、

今案
この在

天神宮
在、
は

た、
はと太宰府と、
あり、
お氏、
安徳帝の、
名付、
安樂寺聖蹟、
傳、
志、
後、
は、
稱、

河内記に傳刻あり事淡日本紀より入るるに太宰府所
十二寸の大鏡とありしりの遺言あり 聖武皇帝
天平十五年三月太宰府缺肢赤魚自是毎年元日の
節赤魚用之 後赤魚はすし魚に
赤魚川とあり
拾遺集より元光も初まらるるん云つむの事あり 慈法

都府樓蹟

太宰府友会のみありあとの少くも都府の樓ありハ
都府樓といふこと 天智天皇の冲時始て之をせむ
といふに地東西十四町南北六町大なり礎三十あり其
礎石のつまも方六尺余あり内柱のまはりにあり二尺
一寸許ありといふこと古瓦の跡も多し都府樓の瓦を

長國より傳りてと云傳へゆるを瓦とて彫りし祝今も
行ゆる人ほく是も之を精確なる事恰と鉄のこく四
邊石のこくはして奇蹟とすし天神乃詩に都府樓終
見瓦色と作てありと此瓦れ事なり

學業院址

觀世寺村の西れ瑞々も南に向へる地こも西に小川流る
學業院を 吉備公初て立置ありと云吉備公ハ天平律室
六年に太宰大武に任せらる物也ハ此府創立ありといふや
又吉備公入唐して弘文館の聖像と持ちあり太宰府
學業院に安置せらる吉備公又百濟の画師を命
じて彼處と寫さしり都の大學廢しとあり

吉備公の
遺言あり

孔子の春秋の釋典の礼多し附大學寮より孔子及十哲とあるは法皇より先聖文宣王孔子とあるは仁天皇府より先聖先師関子寒と三座とあるししや 延長武才公考より及へり則けはるるありたりありし 先聖先師古より孔子と以て先聖と以て先師と云唐太宗貞觀二年孔子とありて先聖と稱ふと先師と稱ふと云皇神護景雲三年太宰府言此府人物殷繁天下之一都會也弟子輩學者稍多府庫唯五經有未三史伏乞列代諸史各一部賜とりたれハ帝より三史三國志晋書各一部と賜りし由續日本紀より云くは時子てハ十七史いすこはるる南史 之後何よりり世にこれより以下の史も多くあるなり 聖像も失せ聖人の教もこれ

文籍と云くあり今ハ唯之流の之残りて農史の宅とありありありとては程ありありありとては事と

觀世音寺

普門院清水山と号し源氏物語玉島に記さるハ大武の沖館の上れ清水の沖とあり觀世音と記さるなりと書り寺乃りしるは田の中と記さるの由りありけり清水の号ありたりやけ寺ハ 齊明天皇乃沖為り 天智天皇の沖時より開基と云るともや淡日本紀 文武天皇大寶元年八月甲辰太政官定分觀世音寺筑紫尾寺之封大寶元年起計滿五歲並停止し皆准

封施物とありて大寺ありし以久敷とても成立とあり
一也後日本記和洞二年二月と詔して曰筑紫觀世
寺と云ふ者淡海大津宮御宇天皇天智天皇の御事後園本宮
御宇天皇齊明天皇の御事の爲に拓き新し奉て基とあり
年代と累子て今とあるとていふと終るはあり
大宰高きして元駐使丁五十許及閉月迄て人妻と
差及者檢校とありて早く学化せしむとあり者
い時と云く成就せしむとあり元正天皇若老七年
二月丁酉僧滿拈毫俗名後四位上 皇朝臣磨勅して筑紫に於て
觀世寺と名にせしむとあり以後日本記時滿拈毫とあり
うとあり集りてあり

万葉三 心と云ふ乃てありて舟本とありきと云ふありてありと

造觀世寺
初高阿弥

聖武天皇天平十年二月丙申五年と記して小食封と
云と施さるるに續日本記とあり又天平十七年十
月乙卯玄昉法師として筑紫觀世寺と造らせしむ
後日本記とありて云ふも大寺とて別院例と多し
以て輕年大阿と費しとありてその後ハ程多し成
就しとあり也天平十六年六月十日と記して遂行
云昉僧正奪師とあり其日若原唐詞と云鬼玄昉と首と
とて云ふとあり釋書十二
卷并平家 其れハ帝王七代年殺八十年と記して落成
たり天平二十一年平家孫家
元年あり七月乙巳諸寺の墾田地

定より後紫雲世言の八列の五百所を近きとて後日
 本紀に記せり。定武と考ふるに筑前國税之内觀
 世音寺之修理新一萬束。此後國税之内一萬束と
 凡二万束の修理料と多し。其附なきは
 大寺より六十年に修理料ありてハ修補も叶ひ難
 くとありん。又定武之太宰府觀世音寺の講壇
 造立此後四百年と經て。冷泉院康平七年五月十
 一日白り火多て講堂法塔四十二區の傍坊八四宮
 の也廊及之宮殿障欄經堂温室食堂以下一室も
 残るに燒失せり。此時二三位若原長太宰之官

ころし。再興を志し。治暦元年八月五日柱立り。二年
 十月五日成就して供養とてけぬ物也。昔の十か之
 とも及りしと云。往昔中九院ありと云。此院も今
 とも名のこぼして其地人詳なきは。中九院ハ

- | | | | |
|------|-----|-----|-----|
| 護福院 | 光臺寺 | 西福寺 | 徳福寺 |
| 善哉院 | 弘法寺 | 座禪寺 | 徳満寺 |
| 極樂寺 | 宝満寺 | 西福寺 | 妙見寺 |
| 学業寺 | 比留庵 | 軍務寺 | 春五寺 |
| 曼陀羅寺 | 徳軍寺 | 佛鈎寺 | 安定寺 |
| 宗徳寺 | 学匠寺 | 光園寺 | 小原寺 |
| 西林寺 | 金光寺 | 东林寺 | 冲徳院 |

| | | | |
|-----|------------------------|-----|-----|
| 吉祥院 | 安養院 <small>口世武</small> | 知海院 | 真安寺 |
| 常樂寺 | 正教院 | 徇信院 | 光耀寺 |
| 知中院 | 智願院 | 殊妙寺 | 志樂寺 |
| 福聖院 | 瑞正院 | 隨喜院 | 常光寺 |
| 滿堂寺 | 戒樂院 | 戒檀院 | |

其後と亦焼失せりや文明二年高祇法所前寺より
 下りし時法中塔也高法流もかく石のこをむくの
 こといんはゆる疾言の中堂とて廢せり事也又戒
 檀院形のみくあり法縁して後ある僧とて寺尚らち
 南都大寺に來りて彼に法流の地ありてあるに都
 の人なれりや是をともやまきしてえんあるさやうり

さうつきんく何となく志一は多うく見へはるんと書
 り物まは法堂側もその終わら事ハ久しき事とせん
 何とてい何とていん凡古くありて名高くいなり
 一寺院も世をくありてゆけは多く終て其址
 のまを跡もて我をそ形ハ跡もあつるもの多しお
 ころくまもてまもるもそま世に化り初り今か一こ
 其字ハ即て日とありて一常入ゆる古今に愛遷異
 ろろりぬ又法流の朝の付志りくけ下り居住せよ
 しとや行化記の白

府牒觀世音三綱
 入唐廻來學問空海師

右件僧負笈遠藩歟大道空往滿歸優
學可稱今及歸整住彼寺宜至于入京之日准
借住例充供養牒件状如前故牒

大同二年四月二十九日

正六位上行大典大村直繼啓

大貳從四位下藤原朝臣勝嗣

其ころ弘法の位平ちうや前とあるを昔の例る乃
号に弘法と云りある中弘法とる歟言堂横十四石
長十八間とあり一後十石あり寛永七年梅雨れ久く降し
時類破りし其後ハ西れ方の位堂をて古き佛像の
破壊せらるとハ其後ハ元禄元年今此堂と

建立せり其建立れしと尋たり貞亨元年福長美
子所てまう屋うと云高人あり其家寫りしは米多
く尚も建立のころ是と人の位堂と納む尚寺に當
ち川崎琳重計言して幕府及ハ他村の寫人ハ米と
借集めて造るに於て元禄元年と云化儀あり彼
う愛く人の位堂と云米數年の寫利まうて毎年米利
米とありて琳重の借し米と借ふ者造るに於て外及繩
おち徳人は是と助け觀ハトコりは外亦此の言國君より御る
其學化乃彼まも 亦たありしありし亦御る
教須而教の農氏和く是と助く是後堂と云建のほ
あり此堂と講堂と云講堂の亦其親言三樞成

と建一ハ浦ヲ覆々末子ヲ申之ニ佛像ハ昔々在リ
古佛之ニ過々も破壞多クしと京都の佛師中田康意
と招き下し修造としじ康意才子二人誘ひぬる康意ハ
是より先寛文の氏京より下り尚寺戒壇院の申を
修補とすとの佛堂ハひりの大殿ノ所ハと云れども
略莊嚴と云をりける昔々ち候多ク修造ハ一區
一と云ふ一ハ盛なりし時の面傳りて今も大なる構
を能くしと云ふ佛堂のたゞ一と云ふは也廊と
三門と申堂の後ノ総坊とて長き家と云は學舎あり
々々也と西の端ノ傳教弘法の位ノ所ありと外法堂
多し二王門の外ノ名有る總築地あり廻廊の内より

五重の塔と金塔のとあり戒壇院と總築地の内と
別今れ戒壇と云は其餘れ法院ハ今ハ名をかりて其
跡と定むるは物と云ふちの後乃山の谷より古寺は
一と多くと云ふ寺の名と稱ひひりける傍の上首
三坊も才一と云ふ坊と云は尚と云ふ坊之次ハ西坊と
上座坊と近世西坊と座坊ハ總て今ハ一唯當坊の
之跡と云ふ書卷に豊後秀吉云九列征伐の時當りけり尚
田舎人と世變と知りて秀吉云威風と云ふ
と云ふの郡司村長と云ふと對接と云ふと秀吉云の御
の御車と云ふと出云ふれありしと秀吉云と怒り
ち候と没収と云ふ物と云ふハ他寺と異なるは

とて百所の土産と寄附しあはせ後あつたてあ名の
ち飯と付する小早川隆系尚國と飯をうけ後三百石
地と付する其義子赤林の耐隆系に付あひり地も没
收すまわ長政に入國の後も小中詔社法も先國主
の例に依りて飯に少くも飯と寄附し給ひ給ふれり
如水公に時より今にけきり五石余れり産もいり
さるもめ意福院言 天智天皇の御影よりして座像
有りともさ九人をも西の御と不空罽索院言
天武天皇に御影よりして言サマニ人あり西御に
持統天皇の御影よりして十面院言 文武天皇
乃御時海の中より川より七尊言の内改り院言と

いも厨子に内と安置あり 鳥羽院保安年中と太
宰大武長實河内陀佛とあれりと安置し 崇徳
院の御時大治年中太宰大武經忠馬頭院言と东
側と安置し保安年中と院言と河内國相保寛
彰より十一面院言と造進ありいり一六此寺及安置
武藏より二月七より寺乃をこれ道行人と描て西
象椀と掩るを身といりともる夜ときを備鬼と
稱し里に申ゆりて男女多し出つて是と申て鬼
やいひて鬼といひて若くは信いりて是ありこの
いりて院言との四りいり人なりと云 元亨様書
此事弘仁三年より始りて應永年中やて八毎年

是と執りてよりその後つれづれに没するもや今ハ安樂寺の
のとい事跡より觀世言の前のむり石臼とて經り
三人二寸五分上白厚八寸下白厚七寸五分ありあり
是ハ古昔ける管化の時朱と攪する向といふ今あるといは
向し鎌倉の
極楽寺の子孫葉白の言やや子孫葉白といひ後小松院の
極楽寺はあちあちし事とていふらんありといふ
奇洞一むい一唐の境を經り六寸五分ありあり後
經り六寸七分五分ありあり後を奇洞の人とていふ又往昔年
始に驅籠と一時的假面四つありといふ三ツ跡よりい表
書く

觀世音寺日吉御神寶龍王面四内

應永十年癸未三月廿七日

觀世音寺兼修理別當一番長圓

此外古來傳りしける宝物なき不ける彩彼の後に
と云ふせり今も此寺にあり物ありとて古き佛經
古きふしと傳へるもあらずといふ尚寺の扁額ハ小野
道月の筆に「字字觀世言」と書り篤信法書と
歴観一多く寺社の額と云傳りしとかくいふるさ文
字ハいささか不し信し其字ハ漫滅する事と觀
世言の彩彼の後に天満宮に納りてと近年觀世
言の造りありといふけり又い寺の境樓り
より後を世安樂寺に傳り成りといふは後下りて
いささか

菅公の詩に觀音寺唯聞鐘聲と

一建之儀之後延宝六年律僧正洞来住以天王寺了
爰堂と改め此の延宝八年に成就す今の戒壇堂
是の正洞より律僧住以しけ此戒壇より
西別の僧更戒す耐列尚より普但と出す戒壇の住
僧よりハ出さば是定例之觀世音寺の戒壇院ハ近
年再興せしむる和泉國大寺郡大寺山神鳳寺
屬せり凡今天下律院の中寺を山別牧尾古河内
丹南郡野中村野中寺泉別神鳳寺け三ヶ所

山王社

觀世音寺けしらの小山とあり右に記する後西の裏と
とんまの觀世音寺けし日吉神宮とあり是觀
世音寺乃結守りりや天正十五年春吉公薩摩
より沖津の折々六月六日安樂寺に詣てし是
日け所の後殿と接へて居候しあり

松峽

竈門山の西のまより禁者智山の東北よりあり 神
切皇后 香椎乃宮よりけ所の後あり耐飄風忽り
ありて沖津と吹流しあり此所のけ所と沖津
といふし日中紀とんへり湯系九系系と越る古代
香椎乃宮よりと香酒形といふし一河成へ

太宰少貳宅址

智智山の東北よりとんまといふと九系系と云 堀二系と

二重なる是少武代との館跡と云ふ里人の言に依りて
いふ所の少武の友を撰交代多々あり 杉朝御宗
御と証代りし少武茂國住人成夜大將正法名覚
智子武藤少次郎軍勇ありて依て 後堀河院嘉禄
元年初めて太宰少武の領をまき九列の事と司り其
子孫おぼえて太宰少武より故し少武と以て播磨とい
小武系高と曰少武政資永正年中於能前水城討
死しけり少武家以終す少武先祖資光初めて太宰
少武と成て此國より下りしより政資と成て十一代凡
二百二十餘年にして家亡しけり

有智山

△村の東南に在る林中に電門山の古宮あり 祭礼は昔
十一月十日に今九月廿七日にあり 寺社に南竹舟の内と
浄戒座主のやしきとあり及墓所あり又有智山下
之宮宝満の葉の通路にありて金剛兵衛盛子入
道紹翁の墓あり 重剎を清らむしり 名あり 源次之
有智山に住ん 電門山と金剛宝満と号する所あり
重剎を東と号し石塔を刀形中心^{ナカ}乃形之重剎を
清ら事土着つてありて記しあり

△南谷

有智山村の境内あり少武の館の西に方より是をひり有
智山の傍坊もしあり少谷と名付たり今も傍坊のあり

跡より庭石を程より根平中堂に於て其名張と終
りたり茶師を張より元亨釋書中七に大宰府の智
山寺を西引の大権持ありと云源平盛衰記中曰く永
暦元年十月十日菅貞衡朝臣息男資成有智山
僧坊焼失の事と云く三社に神輿と 仙洞後白川
院と振奉る 有智山寺ハ敷山の末寺あり 當り貞衡朝
官資成流罪安樂寺住僧六人禁獄せしめり右
大辨雅頼と云く大泉の中へ作らるると云んが如
事と以て考へんは昔々警言屋代地ありしと近き世
よりて僧坊悉く焼く今も地を田圃とありぬ

北谷

南谷を對して北谷と云ふを小野といひり氏家も村中
にあり電門山僧坊の址あり

湯原

北谷村の北下ろろ野山の麓にあり氏家もあり
ひしけいけい温泉ありと云ふありとありのこまじり或云ひ
こ村の湯ありけいと湯の系と云ふ北谷丹北りる山と
ありは鶴れと云ふ處へきけいあり

万葉 山のこまじりあり 田霧 八つらのこまじり

いとうこまじりや向うのこまじり 大納言孫人

夫木 ことわの袖の海とゆありては

かうとまきりやうへん け家

智光寺社

かまの山の麓小谷村の小野といふ所を西行法師撰集
抄予二とて一ころ筑前國とてすく人たりたりし人
のからりハ中よりこの小野里の郡小野といふ所の山中
今ふれよのいふて拙りたる信長山のけへん久壽
二年二月九日青蓮院法眼真譽と本と削て新と云
つけてんといふりたりとてハ鳥羽院の沖子あり十八の
沖といふ地もたけく先をいふりとて云々若君とて山と堂
とせ給へりといふ沖依はりしとて云々其皇子の住
まひハ別け智光寺といふ寺といふとて云々此の礎の
つとてこのころとて云々

愛岳

電門山より低くして小まきハ大岳と對して小岳といふ成
へハ大石村の上ある山と猿飛の塚山よりかへりて昔
より山より伊豆奈檀現の社とて一と寛永年中長政
公の家長久野外元入道ト心持して長刀と槍つひる
伊豆奈の法と行ひるいふとて此山より改て再興し
宝満山に成りつとて社信といふといふとて宝満より是
と改てり今といふ神とて此山といふ所の人といふ
伊豆奈檀現といふ信濃國伊豆奈山といふ在神といふ天竺
此神茶吉危といふ神といふ魔術といふ好む者いふ神といふ
といふ

大石

△村中長五間許あり大石あり里人是と名を神といふゆへに
おの名と大石を稱し村の上より大石の系といふ所をこぼし
十二塚あり並ひ列せり大石より竈門山の上をさすと
坂と云ふ大石村より竈門峰と云て道程三十一ありは坂
も智山より上りてくさくさといふ所あり安し

四筒畑村

宝満山の南に下流谷の内より四村あり大石本堂寺秀園
由漢系といふ四村より一谷ありて是を東園ハ川の南にあり
由漢系ハ谷れいといふて是を西園ハ川の北にあり是より極は那
山といふ所あり是と糸の山越といふへ大宰府より

都へ上りし大石ありといふ由漢系より本山越へ半里あり
よと山といふ半里あり

佛頂山

竈門山のけききやと云ふ山あり竈門山より一里一竈門
山の奥に院と稱し用山に蓮上人の墓山のいづくまあり
けしと云ふ山中のりり河内郡と柏谷郡との境あり

筑前國續風土記卷之七

御笠郡中目錄

天満宮

深川

石踏川

思川

浄妙寺

幸橋

大城山

四王寺址

原山

坂本村

國分寺址

國分石寺址

横岳崇福寺跡

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

筑前國續風土記卷之七
 天高宮 新山 大瀬山 四土寺山
 天高宮 新山 大瀬山 四土寺山
 天高宮 新山 大瀬山 四土寺山
 天高宮 新山 大瀬山 四土寺山

筑前國續風土記卷之七

御笠郡 中 天高宮
 天神乃沖廣地と安樂寺といふと原山廣院と号け

則菅丞相と葬し交り菅公は沖社安樂寺ありといは

るといふ後平氏 天高宮と安樂寺といふ菅公と天高日

命の後裔菅原の是善竹の子ありて諱ハる真字ハ三

とをりたり 清和天皇の沖時より對策及弟り

陽成 光孝 宇多 醍醐の五帝より久官右大臣との

りと百司とす人弟機と司り公の女徳と並少き覺

果しくらハおとせたりしりと時平大臣は流言よりて延

去年二月廿五日右大臣任官職とやわれ太宰の権師
とた遷をくくく一官直下とさなる二月新後
都と出て魂をこめむをさる事府と行をさる懐
とあむるく

離家三四月落涙百千行萬事皆如夢

時々仰彼蒼

西府も人多れもけくく物も官い合とへき人
とあむるく一官直下とさなる二月新後
沖鏡一やささるくくくく事さるく
世多寺向とふれも控教もさるく或時不出門と
云歌とて侍詩と地とさるく

一從謫居就柴荆萬死兢兢踏情都府
樓總看瓦色觀音寺唯聽鐘聲中懷好逐
孤雲去外物相逢滿月迎此地雖身無檢

繫何為寸步出門行

中つてはして都府樓の一聯ハ乐天の遺愛寺鐘款枕
聽香炉峯雪捨簾看とよ詩も侍りぬへきと
むりの象朝の博士もハヤク渤海国の使者非衣
又稿も菅公れ化と見く白樂天の詩と似ると
より又讀家書とより歌とて化とさる

消息寂寥三月餘便風吹著一封書西門
樹被人移去北園教客寄屋紙裏生薑称藥

種竹籠昆布記齊儲不言妻子飢寒苔為
是還愁慎惱余

生涯無定地運命在皇天

教意苔百韻乃詩と作せむへるる起句と曰

定嘉三年菅公太宰府とて備ふるに終つてせむあ
治と二月廿五日御出五十九とて終せむあ今の板馬沖戸
乃地あり
と太宰府とちりき四堂のありりよ宅兆とてこめてあ
居しむらんとしてけりたて輜車忽しこま中とてせむあ
勅は是とてしつて即そとてしつて沖墓はとて今今の神
席の地是とてしつて四堂のたて輜車とてしつてしつて沖墓とて
即事歴代御年とてしつてしつて四堂のありしとて
今の御年とてしつてしつて延嘉五年八月十九日安樂とてしつて

えしめて菅公の神殿とてしつて味酒安行とてしつて人
是とてしつてしつて後菅系仲平お終て是とてしつてしつて
いつ九年とてしつてしつて是 菅公とて初りて
神とありめ年とてしつてしつて神殿あり法性坊と社
地とてしつて
形と御写せりといふとて始とて猶矮少ありしとて年とてしつて
漸く壯番とてしつてしつて菅公と 天満大自在
天神とてしつて奉りてしつて天判山の
一條院正曆元
年朝廷よりとて沖社と正一位大政大臣と終つて
しつて勅使菅原幹白御長とてしつてしつてしつて
席前と机と置 詔書とのせてしつてしつてしつていつの時
とてしつて天満宮と席号とてしつてしつて

宮に字と稱する事 帝王に神靈とあり奉る所
社ありては其号を以て 伊勢 八幡 二所の宗廟に
以て其号を以て其德と号ひおろすて 聖廟と号
せり。伊勢里の帳中書有(才二十)と在邦口傳る云むり
飛鳥守府の若丞相祠堂の額と扁して 菅丞相
廟の文字と書く 神意中と記して曰ふこれ福后
よりて此地に寓ん 靈を以てよりて丞相の号と追稱
する廟の字と之のよりて朝廷乃朝の字を我祠堂
と於てよりてせしきなりこれ廟乃古字廟之自今以後
吾為之則廟の字を用ひく廟に字と用ひくは
是又文選六十卷 漢讀成就乃時先帝傳文の一件に

と 園融院 永觀二年廿卯社の中門一字と廻廊と
あり此より又口時常の堂宝塔院と云ふは是
勅命を以て修り修りたる以後おぼえて世より 帝に勅
して堂塔院多し此を以て事ありて其人多し
ありゆへ時と遊するなり 聖業に靈區とて行ふる
二月廿六日沖忌日なり毎年祭礼あり物々 堀川院
承徳二年九月大に中納言匡房御太宰の都督と
記してありと云ふ 同康和三年に都督夢相其事を
てりて安樂寺の沖忌日と行ひ八月廿日 神體と假
し淨妙と云ふなり 神輿守府にあり
あふ僚官社司馬と云て供奉に廣院の都督

あり 神輿は其内之やとて神事と其前之行ふ
翌日之宴終りて暮るる 神徳契智りきまふは
おりの饗宴といふあり 神徳契智りきまふは
礼年とて後事ありて潤色とて添ふは
古今著聞 今も其作法二十方乃曉く 神體と假
と後寺乃沖張河に後しとて先宮司清盛院
縁齋戒し 神儀とさくありて内所の燈
と赤清して越殿樂と巻紙宮司換校坊勾当切も
とすけとてはふすあり 其後 神輿のあと先
沖社とて一巻紙神燈凡二十八 神輿のあと先
かけとては文人三人衣冠一馬とて先近人とし

沖とて石淨の事ありて文人後とて三人童子
二人烏帽子系袍と巻紙一馬と系本とては約形と
いふは先近とて又童子二人是も烏帽子系袍成
巻紙ありて棟の板と持りて唱をて唱へては
是も其次とて沖張河に 神輿の沖先とて 神輿を
駕輿下十二人とては奉る 沖輿はたちとて松明とと
ます 龍画とては縮こらしとて二人とては
この四人はちとて沖輿乃上とては二人とては
おろしとて二人沖輿はしとては二人とては
あともはきて笛又鼓とては沖社より板寺まで道
のわとて巻紙と巻紙其次と神馬三足といふ次と五

別當の事と馬とありて供奉の詔とハ三綱お馬と云
 之非神人多く庵後なるを遂と有りて 神輿に
 従ふ者多し宮司二人と先立と核寺と引居てい久
 ち有りて神所迄引後一まかせ其日の末几刻核寺
 と出させあひ 天満宮に石のち升れ側浮殿と中入
 廿四日敷成の刻とありて 中庭と云へ入奉り入
 中の時も出中れ時の如く燈と有りて言樂も其後五
 別當三綱九八人中幣と云けて之後竹の舞を竹
 此舞をいふへの思ふれ舞風と云ふ一人とて舞ふ様
 樂乃と云ひの如くある儀との凡すの時れ儀式を此の
 祭れ振ひとすこれいと静にして歳々もあまハ誰と云々

ありて事とありけり國及隣ふれ貴賤男女 神
 輿と有んとてありけり古歌し此春秋二夜の大祭
 今とありて年毎と急事ありしは秋の祭ハ匡房より
 初りて行を道とあり且二月廿五日を中庭と云ふは是より
 毎年祭れと云へ一年と只一夜の沖祭ハありて
 うけりやうと傳ふハ又秋もあり奉りありん其秋と
 祭れと云ふこと唐書も云々多き道ハ師へ匡房又
 勅と云く滿朝院と沖庭の作りて造と云ふ
 康和 六条院仁安三年よりして 神前と日別の神食
 三年と 東院と云ふと安樂より尚安徳信都毎日神供と
 と供ふ 洞中氏と云ふと云ふは安徳無行と事と云ふ
 ありて急事と云ふ今と其法と云ふ神と云ふ一冲の神飯と

うろ高き塵いらくの供物酒を供へ奉る凡十五饌
三十六急神厨多てこまこととの鳥帽子白張着る
役吏是と前子躬く糸礼れ行り事かくのこ
又寺をて毎年卯月廿日亥月廿日ハ暫入く
神前之沖合と供へあるはゆるを表はるは沖衣
よも新しさとまうて古きとハゆるはひ糸いつの時り
うろくんいさあは又いさくは神のこり年毎に交
の宮とおとある内宮^{四月}曲水七夕^{十月}残菊^{五月}是
こ凡うのりち川尚つ下徳人こくく一は之集り
ことと詠し文人詩と歌して詩歌管絃の合は
と也

光明朗詠の詞々 一条天皇御宇安樂寺
託宣有其詩曰 家門一掩幾風煙筆硯拋
來九十年 右宰相官くことと巻は仍て安
樂寺の文人と置き節日毎く詩篇と歌せ
しむと也

此沖神はまらりて風雅におりし神の沖心
あくさめ糸せんち成へし匡房ハ早喜れ内宮
安樂寺の聖廟とゆるて春來悦者多と之の歌
く七言れ詩并序とゆるる序のりく曰夫安
樂者管大相國聖廟也形勝絶四海靈驗鼓動
於一天 ^{出續本朝}又康和四年の壬匡房師安樂
^{文粹}

ちよと曲水の宴と行なはるる序と他は
その詞のいそぐ

堯女廟荒春竹深一掬之淚徐君墓古秋
松懸三尺之霜

とくし匠房々都々ゆり亦祥二年又
於磐くもりきまなり

或時匠房々安樂もくはて五言の古酒詩一首と
他は凡四百句ありて朝として古今の大字といは是
と括弧又西府の詩一首も二百句五言あり並續
中絶文
釋中らる世とありしよりいこ四交の宴もく人
て久く行なはるる只七夕に和歌の宴を致す
例り毎月ちみりて一斗れ言はる社司あつまる月次の

連歌ありて年々月々悔意あり又曰く如く年毎
く結交の節ハ五日一舎して連歌と詠す西月せら
の夜西に對して参詣するありて法
事となりて後遊遊も鬼と云はる人々を
て鬼と名つる堂ありとて杖して乃き松の
今よりしてあまて鬼と云ふ事今も年
毎くくく人々ハ歎世言寺武荒る安樂もい三ヶ
ほよて行ひたる又此園に香雅宮住吉の社も昔し
けりありて道鬼やいり年々始り寺にわらうの
居り人々もく鬼面とおわりせりといふれ
あまきぬとて鬼と括一里の内ゆりて男女多

かろく、初高守職と勅めしと也 大寺の向の宅
あるゆへにその家と大
寺の家の名と少寺の家の名と 又官司あり二廻あり
文人あり二家あり、又て社職二十六家、その外、
の社人程二十人許、各凡 海くとして 取替て後、
神前の宿直上旬を、檢校坊中旬を、満盛院下旬を、
旬番坊は、まゝまゝなり、むりく、まゝなり、て、口敷も
、行向も急る事也、この三家を、彼味酒安行の苗
裔なりとす、とす、

一、一 宮内神領園、と多る、り、ゆへ、一 神社、
社司も、急る事あり、と也、昔、鎌倉の源將軍の、付託
後、園、山名、田田崎の、ある、と、安樂、ち、り、寺、附、せ、ま、し、

りあり 一 東艦十八卷 一 主後、と、世、増減あり、世、乳、ま、と、
九列、と、ま、ま、か、り、り、り、り、一 神、社、ま、ま、ま、ま、と、わ、天、正、十
六年、小、早、川、澄、系、當、主、と、成、り、あ、ひ、く、後、沖、宮、郡、の
内、と、二、百、余、所、の、神、社、と、寺、進、せ、り、文、祿、四、年、十、秀
吉、か、り、り、五、百、名、れ、地、と、寺、附、も、澄、系、の、義、子、秀、林
の、付、託、社、れ、神、社、ま、ま、く、は、收、せ、ま、ま、と、り、い、沖、社、の、
五、百、名、と、寺、附、せ、り、長、政、公、入、國、の、後、二、名、名、れ、神、地、と
寺、附、し、あ、ひ、か、り、り、り、り、後、に、寺、附、水、田、乃、是、
も、名、の、地、と、將、軍、家、り、寺、附、し、ま、ま、と、り、り、り、り、
り、
城、主、も、馬、氏、り、り、水、田、の、内、と、二、百、五、十、名、元、和、八、年、り、

寄附せらる柳川の城主立花飛騨守親成より五十石
寄附有るに云々あり水田の天神也云々の
後堀川
院嘉禄二年長者家大藏御菅原為長ありと
建立す又筑後國北野村に京都北野天神と勤
請して是又大社あり

一 此社創立の後火災の如き或造替あり事度
ありしと也 後冷泉院永承五年三月後土御門
院明應七年十一月二十日又水尾五年天文十九年
回祓の如きあり天正六年十月中旬社月種実龍景
彦門大軍して岩倉の陣より押せ在るに火と
放り城下まで焼く岩倉より兵と出るる家此款

寧ろ府守て引退く物多し此社より社人亦多く其入
りも多しと云々縁と云々此河の氏人ともてことり
社内狭きがうを云々社月種實は度つう社中
と云々氏人のも多しと云々の属せり北嶋玄為と云々
天正十五年六月十日あり此少為と云々火と云々けり
復多し社に付て唯一時と云々灰燼と云々社人向高坊快宗
云々いり社月家七代まで云々あり崇り後云々と云々の火の
中へ飛入焼死するに云々の世と云々社と云々建立と云々
ことり社人等天神此社神と奉りて表原郡
桑田村に姓と住り 表原郡の 小崎玄草の社と焼し
料と云々切替すは年小字川澄宗は團れ主と云々あり

け時社を唯形を前の假殿あり其後も世の中移り
可くはるる一りとも隆系 神殿のありきまぬ事と歎き玉
ひて天正十九年けらけりては社と建する今乃
神殿をあり 横七石 交長三年秀秋國政にりかると
一り八秀吉公より國を没收さるる石田治部備三成候に
代有る事ありけ時三成橋門と建立候 長四石人横
長政公入國の後父如水公にけりて居候しあひけり 今乃の
辰の宅れゆの け 社の方の昔に留りおらる事とあはせ
地宅ありて 長政公にけりて 中門廻廊 四 と之を
法堂未社とけり 徳堂未社今 凡四十四画あり 凡そつと
りて成りて 神と尊崇し社と修養し社傳祠

友とあつてあつてむいりて 神も人も切しよるて
一へとゆ事と得る今とありて祠官に事ある物
とよく 如水公交長九年三月廿日とありありあひ
社傳をやくみの厚きと感一年にけらぬ九月に連款
はらへりてけりて 如水公の為と追憶の連より成
候事今と縁する石燈籠數十基を 忠之公は
と之を交長年中 光之公を改て又 忠之公の
名と記さしめり又 神前の池にけりて三石の橋に
石に橋柱に石に橋柱 光之公にけりて石に橋
と改ては信長の人けりて石に橋と改てけり
及橋とをき石乃多居をけりてけりて誰人の

五丁といふ事知まは其前大所より入りある石の鳥
居ハ元禄九年三月影をくすそり延寶四年丙辰宮
司換校坊使結文学の志ある人の役もあまじくして
いぬかの辺り一 沖社の文庫と一字をくすといふ地
まより衆力と呼ばれて成りぬやそ四方に國より經
史を外よりくれば文も多くこころ納めをまよりいじき
神室ありし 橋のなるより遊き歎言の塔あり是ハ
と代兵火もあつたをいふよりそあり凡は沖社を
南に向り社前沖池もそる橋ニはくすを向り
中流を直橋を沖池のくより百らる凡宮地東西
ありそ方南に百七十ある 竈門山東に傳へ天判山

西といふは津川前とそ石津川少く流まはあよりりて
思川とそ四王院大城山少とそりきき城の驛南と
あり右と教世壽寺を都府橋れあと太宰官舎の
地をそとあつてあより山川村里のくき林の本を
またそ河多つづの宮にありこころまはれる住境
ありは西府今ハなりそ谷より山懐をそと 沖社
乃ありまたゆくと人裏多くいふをそ並へより
のれ盡地とあつて宮柱をそりて 神徳乃
いとまはれをそより山へ成へし は里といひりり鶴とかりん
いなるをそり事とそりん
も河内國土師の里 菅公詩歌とぬとあひ沖心をそ風
物といふし傳をそり常く橋渡をそ傳くそあひなれハ

淨社のわらわくも梅と多く植まらせ今もあうと
ふり又松といふてこふいけるを凡松は美木
り洞ありと後霜雪と注てふとをあり衆家
ハ探る梅ハ色と香し清くして、花つのも先く
いり雪のまき成りて開く事誠といく意
へき花あり松梅とも君は徳をいへる色ハ
淨の沖にけりてをさへせむひるも宜也又都々
東風ありと詠ふの如梅一較と右掌府と飛木
ありとせよハ言傳へゆる其梅と飛梅とを稱しける
其木を種と植へて今も 沖前とあり
形冬
神祇記 けさけくちえつじ家岩のありやまきね梅の立枝と

このうへに建久三年ハ春のころけりし中よりなるもの
安樂寺ハ梅とわけてけりたる数ありて今もなり
又梅ともこころをせむひるも後探る家より
さへさるる時前我の梅はさしけり

菅原右大臣

梅ふやけりしれものありやまきね梅といふてせむ
かく生前に沖にけりしとわたりしなりハとて名前の外なる
ものありたりと並木れりしは梅植へ梅は馬場とあり
一 平家物語ハ壽永二年乃秋平家盛一門とあり 安徳
天皇に供奉して筑紫より逃るる八月十七日太宰
府にたるとなる日平家の人々大団圓とけり安樂寺

と多う秋もよめり哥よ連哥して宮仕をささぐれ
中にも不三位中将重衡也

任多し古都の感一神もひりと思ひいふん
人々誠とあわれとて守神とをわづらふ源平盛
嘉記二十二巻一八皇后宮亮經正の化をり聖嘉記二
十巻あり方の言をいひて神もひりけり
いとあり玉葉集にも重衡の化とあり八盛嘉記の記
を誤るん
拾玉
の光りも抑さるん一つしる西の言あり
けりしとゆりて安樂寺とあり
神也といひ家入し樹の花とて老木とあり
經信

安樂寺聖廟望勝形 源時細

轄暗何處趁風流古廟勝形足以遊山疊畫
春雨巧林調琴筑晚嵐幽羈愁蹲下醉空忘
詩癖花前老未休洞裏煙霞徒可樂一生何必
在皇州

冬日叅詣安樂寺聖廟

府之東北一松壩斯地侍名從昔傳靈跡長垂
年二百德輝普照叟三千歸卿期近春風日侍
廟信深夜月天運命取勞雖至拙愚兒景福任
神憐

右の詩二首無詠詩集に載り

一 博多より寧府へり及河々の名

博多 聖福寺 妙樂寺 承天寺 辻堂門 謝國明墓

比惠 山主社有 板付 邦君の 麦野 板付 尚井村境内 雜餉

隈 尚井村山田井田の内あり 九郎天神 俗にぬす人

喜白系 唐野あり 喜白村 雜餉隈の西南半里あり 喜白の社

河原田村 大野山 大城山 大野の 下水城 水城大堤

水城園址 上水城 水城の南あり 外萱園 あり 二口市と

寧府路の岐園 たの山あり 四王院 たの山の北あり 太寧府蹟 大門

岩屋塚址 たの山 学業院 太寧府あり 思川 西府所入口の川

音寺 たの山 横岳 太寧府あり 思川 西府所入口の川

寧府所 深川八社の

一 尾山より寧府村より岩屋の城とせり 村北月勢

の陣にありと云

一 立石山より安樂寺の築より 扶桑略記より 高倉院

安元二年七月六日大信 宣下より安樂寺の築の方洞碑

十出外事令諸道勅申より 立石山の事ありと云

一 寧府町申 東法華堂より 今よりありて 時大教

あり十二町と云 今よりありと云 一月と云

つらつらとて かつら 各寺に 福あり

深川

天満宮の南よりあり 小川あり 深川と云

何務
おほ
後藤
吉

深川と云はん人のいそららよめそよこのあふん業平
女のまゝけりたる

ほろろの深川つらき水やまゝらんよまひ時あく藤原直忠
いそら

後藤
十二
吉

わうてあふりかき深川の心下りこあふんをまれよ人よん
深川とやこる波のまれなきも今なきや一 源重之
河之のまのまじけ深川のまれよとんとやまを良藤宗貞

右二首太刀ねりすまをまを求多る監人命ぬり清よん
あふりかきいそららよめそよこのあふん業平

堀川
百首
良至

人心かめてまをまをいそららよめそよこのあふん業平
いそららよめそよこのあふん業平

堀川
百首

深川の岸よあふりかきいそららよめそよこのあふん業平
いそららよめそよこのあふん業平

堀川
百首

いそららよめそよこのあふん業平
いそららよめそよこのあふん業平

堀川
百首

いそららよめそよこのあふん業平
いそららよめそよこのあふん業平

堀川
百首

いそららよめそよこのあふん業平
いそららよめそよこのあふん業平

堀川
百首

いそららよめそよこのあふん業平
いそららよめそよこのあふん業平

可深如何不變白頭愁

石踏川

種大信
信
左馬助
資宗

天満宮の少きより思川の上より川流をせしを以て
ついで多もかきより宇治山より宇治府へ越ゆるをこ
万葉うゑ山とよみしをいふ思川と約するなり 為親

思川

宇治府所名の西へ流る川といひ川に當りて他府の當り
大なり古昔もいひ川に當りて思川の世々の勅撰
及家々の書集にも多く載るも今も昔も其の難し今こ
ころついで教首よりいふに思川といひ川に當りて
ぶしつ

後撰集
伊弉家集
勅撰
十一

思川なる川は水の流れはゆるぎなくありてきくや
おの川なる川は水量の多き流はゆるぎなくありてきくや
皇極院
川尚

流るてれ名とて思川といふも思川といふも思川といふも
思の川といふも思の川といふも思の川といふも思の川といふも
思の川といふも思の川といふも思の川といふも思の川といふも
何人思教九回腸流出長河脈々長西岸好移連
理樹堪棲比翼紫鴛鴦

淨妙寺

今ハ板寺と号ハ此寺ハ菅丞相太宰師とてけけお
うまじく地あり 後一條院の時時治安年中都督
惟憲卿彼ありとかりい伽藍と一宇建りて今も
今も残りて佛堂一宇残りてハ有力言 天神の御輿

此よりつとせよ沖菰河あり其日の来れ時い何と出し
事せ天満宮の石れも居のりて浮殿と沖入の日は
廿四日の成れ時よの沖殿へついで奉るい堂三回也
而より釋伽多寶二佛と安置はせと云傳へらるち
菅公在近せよと云い宰府につせよいなる時麴高の
家と立入あひたりと云麴高の妻いよく思へるけり
よとてや奉りぬと云い悔りて敬さうなるけり
老妻と菅神いとおいさよめとお傳へい夫とい
くやい思ひあひく其老女と本像と安置
を夫といかきう形勢とつくりてい書くと云はるは
いとい二像をいはい俗流信するといはるは

幸橋

安樂より沖菰河より尾核寺れ前より小き石橋
と幸橋と云八雲沖抄藻をいよるは伊勢國へ入り
伊勢國の橋本河のいりて後殿とてお伊弉系向の時
い何とて後する河あり其東にお橋をいせと再物の橋
と云是をいんとり物といはるは是再物の橋として幸れ
橋といはるは本集と歌の初書といはるはありゆり
名考すといはるは名は方角抄にも能市園へ入
りたるこのより歌も太宰大式れ寄られはいふとを
是といはるは

旅中 其のちりきりなるもろなるゆゑは之の幸れ橋とほふん大武を

大城山

萬葉集第一巻に大城山者在筑前中津郡大野山之
頂と云ふ四王院のありけり南の方まてまて山の峯
と大城山といふ此山の嶺と教乃峯といふ一日本後紀
に云へり又八雲中抄に白大城山筑前と云ふ
万葉今も此大城山と都なむと云ふしん家なれり

右乃く萬葉集曰大伴坂上郎女思筑紫大城山歌
いりちりきりなるもろなるゆゑは之の幸れ橋とほふん大武を

大野

津道の森れまより東南の方四王の山の西れまより
又南の方圓の西まてとまて大野といふ一は
師れ名より和名抄に云へり山はまより東まて
万葉山野山旁まてり家なれりけり風のまよりまてり

見安云むさしの風人の息とわつるけり風のまよりまてり

現存集
敦親著

大野山まよりの東に旁まてりあまの風と月をまてり

四王寺址

坂本村のやうに四王寺山のよき寺に山号圓滿山
といふ又此山と教乃峯といふ坂本より山とまて二里許あり

創立此時代詳多日本後記延暦二十年二月癸丑傳
大宰府大野山寺行四天王像及堂舎法物亦並遷便
近寺とあり 平城天皇大同二年甲寅朔大宰府
言ハ大野城鼓峯之堂宇と建立し四天王の像と安
置して僧人として法の如く修りせし物也と制旨
しらく既に停止し其像并法物ハ筑前國重光明
寺にあり垂ぬ其人重堂亦今も存せり像と據して
しりけしと疫病を乞ひ依りて治りし事とありん事
と傳ふ 勅して是と傳ふる但傳と法て治りし事
とあり又嵯峨天皇弘仁二年二月庚寅大宰府鼓
峯にありしとあり 經伽佛の像と傳ふるあり
正上日
車紀

文德矣詠仁壽三年五月壬寅大宰府之詔し
四王院として大般若經とし事しありし是疫
病と據ありしあり 三代聖徳太子貞觀八年二月壬寅
神祇官より奏言ハ肥後國河嶺大神怒氣と儀
ありし事とあり依りて大宰府司四王院して金剛般
若經三千卷般若心經二萬卷と抄讀せしありし
事も但城山と四王院とありし四王院ハ大城山と
あり城山と四王院と三代聖徳太子ハ城山と四王院と
ありし事とありハ大城山と城山と稱して城山四
王院と書しありし四王院ハ傳傳ありしと云
傳しありしハ大寺とて 朝廷よりし事といふ

ちありけしけしける所の付よりり炎上して跡絶せしと云
礎河に残り四王院とて終頂と云ふる草庵成
立置れ井も於之河に流せり又岩屋に城ありの小五丁
よりして四王寺の跡に址とて礎をて河に米の焼と
る石をより灰れやくしてと高城せりこ道ハ米を
炎との付米も焼くつ跡と云上座部より村ハ並
長者の宅址も焼跡と云米も凡米も焼ゆと云
久と流てるよりめて朽けしるん仙考國汗入郡名木の
の底と名和長年、宅址も是も屋敷の址と云の中
焼承れるより成るるも是も長年屋敷と焼て毎と山
麓跡せし時倉の内米跡りなる焼くると云朽垣堀

集り四王寺山と題してあり

老む道にありかしてありてありてありてありてあり

原山

石碕川の少ある山と云り其ふまゝの系と云ひハ吾輩
寺といふところは是四王院の別院とて四王院に属し
山門は横川西塔を動かすをあると云し四王院跡絶
の跡にちとまゝに遺せり菅公在迹の前よりこゝに
菅公薨りしにして後森系の時此に遺れもまゝに事
とありるは其寺廢せるとも遺るありて安樂
寺と云ふて天満宮に社傳とありハ坊に在存す

足利京八坊といふ

坂本村

四王寺とのちの替りて居る物ありて坂本といふ車も通
りて坂本といふ坂本のといふ石垣も四王寺の門に流
る石垣のまゝに二なる長さ七十八有ありしありと
ありし門に礎も大なる麻乃地とい村と國分村とい
ありし言ふるもや四王寺の座主は居たりしと跡も
坂本村といふは座主は大僧といふと極官とせしと
いふ

國分寺址

國分村といふ諸堂大塔の址として大なる礎尚残すといふ
の跡より廢絶せしや某師表として村もさし申す小き某
師堂も其の跡も礎のまゝなり 聖武天皇天平九
年丁丑歲 勅して日本六十六列之州毎に國分寺設
まらる文徳天皇保仁壽三年五月左京府官内國分
寺といふ大般若經と讀しむれ事も延喜式に尚國
分のまゝなり第三子二百九十三米といふ 是坂本ありて百五
拾石余なり
年といふと昔より村の跡も後世といふに深奈石類
の跡が手後と藤衣と藤と身といふもさしとせむ
しと連巡の福屋といふに跡も寺家といふに後なりといふ
と法別のみありて廢絶するに跡もさしとせむに跡あり

こゝより此地と谷の間をまわると閑寂なる境に
あり深慧墓と横岳とゆるるのやうな山あり
宗福とて始て創とて一人ありは亦入定の地なる
石塔と建て其より一とに

筑前國續風土記卷之七終

四三三

